



大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

National Institutes for the Humanities

GUIDEBOOK2015 要覧2015





大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

National Institutes for the Humanities

機構長あいさつ	1	Message from the President	29
設立の経緯と目的／ 人文機構のビジョンとミッション	2	Background and Purposes ／ The NIHU Vision and Mission	30
協働する機構と各機関	3	NIHU and the Six Institutes	31
各機関の活動	4	Activities of the NIHU Institutes	32
国立歴史民俗博物館	4	National Museum of Japanese History	32
国文学研究資料館	6	National Institute of Japanese Literature	34
国立国語研究所	8	National Institute for Japanese Language and Linguistics	36
国際日本文化研究センター	10	International Research Center for Japanese Studies	38
総合地球環境学研究所	12	Research Institute for Humanity and Nature	40
国立民族学博物館	14	National Museum of Ethnology	42
人間文化にかかわる総合的研究推進	16	Promotion of Research in the Human Sciences	44
I 連携研究		I Inter - Institutional Research	
II 連携展示		II Inter - Institutional Exhibitions	
III 研究資源の共有化		III Resource Sharing	
IV 日本関連在外資料の調査研究		IV International Collaborative Research on Japan - related Documents and Artifacts Overseas	
V 国際連携協力		V International Collaboration and Cooperation in Research	
VI 地域研究の推進		VI Area Studies	
VII 情報発信		VII Public Information Services	
日本研究功労賞／ 知的財産	22	NIHU Prize in Japanese Studies ／ Intellectual Property	47
資料	23	Reference Materials	48

機構長あいさつ



人間文化研究機構(略称:人文機構)は学問的伝統の枠を超えて、諸分野を連合し、自然環境をも視野に入れた人間文化研究の総合的研究拠点を形成し、そこから新しいパラダイムを創出することによって、自然と人間の歴史的営為が、地球規模で複雑に絡みあって生じる21世紀のさまざまな難問に立ち向かう手掛かりとしようとしてきました。

法人化後12年目に入り、いよいよ中期目標・中期計画の第2期の最終年を迎えることになり、今までの軌跡を総括するとともに、第3期を新しい研究体制で出発しようと昨年度より努力してまいりました。

人文機構は多様な人間文化の研究に携わる6つの大学共同利用機関から構成されています。国立民族学博物館(民博、大阪千里)、国立歴史民俗博物館(歴博、千葉佐倉)、国際日本文化研究センター(日文研、京都桂)、総合地球環境学研究所(地球研、京都上賀茂)、国文学研究資料館(国文研、東京立川)と国立国語研究所(国語研、東京立川)の6つです。各機関はさまざまな学術分野にわたる研究者を擁していて、それぞれユニークな研究スタイルを生み出していますが、同時に各機関共通に総合性、研究教育の卓越性、共同利用・共同研究の高度化、社会連携・社会貢献の実現を使命と考え、人間文化研究の新しいパラダイム構築実現への準備をしております。

平成25年3月にまとめました『人間文化研究機構のあり方』で提言された①総合的研究の新たな展開、②海外との連携・協力の推進、③デジタル時代への対応、④社会との双方向的な連携の強化、⑤次代を担う若手研究者の育成を重点課題として、一層の機能強化を図り、ひいては知的社会の質の向上に資することという基本方針を実質化していくことによって、第3期の像は具体化を帯びてまいりました。今年度の『要覧』はその進展の経緯の中間報告でもあります。

国立大学法人等の改革プランを活用しながら、人間・社会・風土を真に豊かにするために、専門分野、社会、習俗の壁を超えて人間文化と知識・伝統を創造的に再構築しようとする人文機構への、さらなるご支援、ご指導をお願い申し上げます。

平成27年4月

大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

機構長 立本成文

設立の経緯と目的

大学共同利用機関とは、各研究分野における我が国の中核的研究拠点 (COE) として、個別の大学では維持が困難な大規模な施設設備や膨大な資料・情報などを国内外の大学や研究機関などの研究者に提供し、それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関です。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 (以下、人文機構) は、平成 16 年 4 月 1 日に設立され、当初は、人間文化にかかわる大学共同利用機関である、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所および国立民族学博物館の 5 つの機関で構成されていました。平成 21 年 10 月 1 日には、新たに国立国語研究所が加わり、現在は 6 つの機関によって構成されています。人文機構は、これら 6 つの研究機関が、それぞれの設立目的を果たしながら基盤研究を進めるとともに、学問的伝統の枠を越えて相補的に結びつき、自然環境をも視野にいたした人間文化の研究組織として、大学共同利用の総合的研究拠点を形成するものです。

また、膨大な文化資料に基づく実証的研究、人文・社会科学の総合化をめざす理論的研究など、時間・空間の広がり視野にいたした文化にかかわる基礎的研究はもとより、自然科学との連携も含めた新しい研究領域の開拓に努め、人間文化にかかわる総合的学術研究の世界的拠点となることをめざしています。

人文機構は、6 つの研究機関が全国的な研究交流の拠点として研究者コミュニティに開かれた運営を確保するとともに、関連する大学や研究機関との連携・協力を促進し、研究者の共同利用および多面的な共同研究を積極的に推進しています。

人文機構には、国立歴史民俗博物館や国立民族学博物館および国文学研究資料館など、博物館機能や展示施設を有した機関が参画しています。その特徴ある機能を利用して、機関間で連携して研究情報および研究成果を展示したり、さらには刊行物やあらゆる情報機能を活用したりして、広く国内外に発信し、学術文化の進展に寄与しています。

人文機構のビジョンとミッション

地球上における人間と自然の共存、世界のなかでの人間同士の共生という、21 世紀における人類のもっとも重要で緊急の課題に、根本的な解決への鍵を提供できるのは人間文化です。科学技術一辺倒ではなく、健全で豊かな社会の発展には人間文化のあり方を見直すことが不可欠で、その指導的立場を本機構が担っていかねばなりません。

学術専門分野・社会・慣習の壁を越えて人間の蓄積してき

た知識・伝統を創造的に再構築して、真に豊かな生活の実現に向けて、問題解決を志向する人間文化研究の新しいパラダイムを提唱することが人文機構の任務と考えています。

ビジョンを達成するための役割・使命として 6 機関が共有するのは「総合性」「研究・教育の卓越性」「共同利用・共同研究の高度化」「社会連携・社会貢献」の 4 つのミッションです。

総合性

価値の多様性を認めつつ、人間とその文化を統合的にとらえる方法論を提供して、社会発展、創造的主体育成に貢献します。

研究・教育の卓越性

グローバルな中核的研究拠点であるとともに、社会文化の変化に対応出来る教育研究組織作りに貢献します。

人間文化研究機構のミッション

共同利用・共同研究の高度化

大学の国際的研究能力の強化促進の支援とそのため研究環境を整備します。その一環として教員の流動性を促進する環境を整備します。

社会連携・社会貢献

情報発信・広報機能を強化して人間文化研究の成果を普及します。また、民間企業・NPO・財団法人等との連携により社会貢献・情報発信事業に取り組みます。

協働する機構と各機関

機構と機関の連携の方向性

人文機構には6機関あり、それぞれの機関が積み重ねてきた歴史の中で独自性を発揮してきました。たとえば、博物館といえば歴博と民博。日本研究といえば国文研、国語研、歴博、日文研。世界研究といえば地球研、民博。さらに日文研も日本の中に閉じこもるのではなく国際的な発信をミッションとしていますし、外国人研究者も多く在籍しています。これら各機関の特色を生かしながら、機構として一つにまとまっていく仕組みが今求められています。

第3期における機構と機関の協働のイメージは、右図のように考えています。機構が各機関の上から指揮するのではなく、お数珠のようにつながって協働していくイメージです。



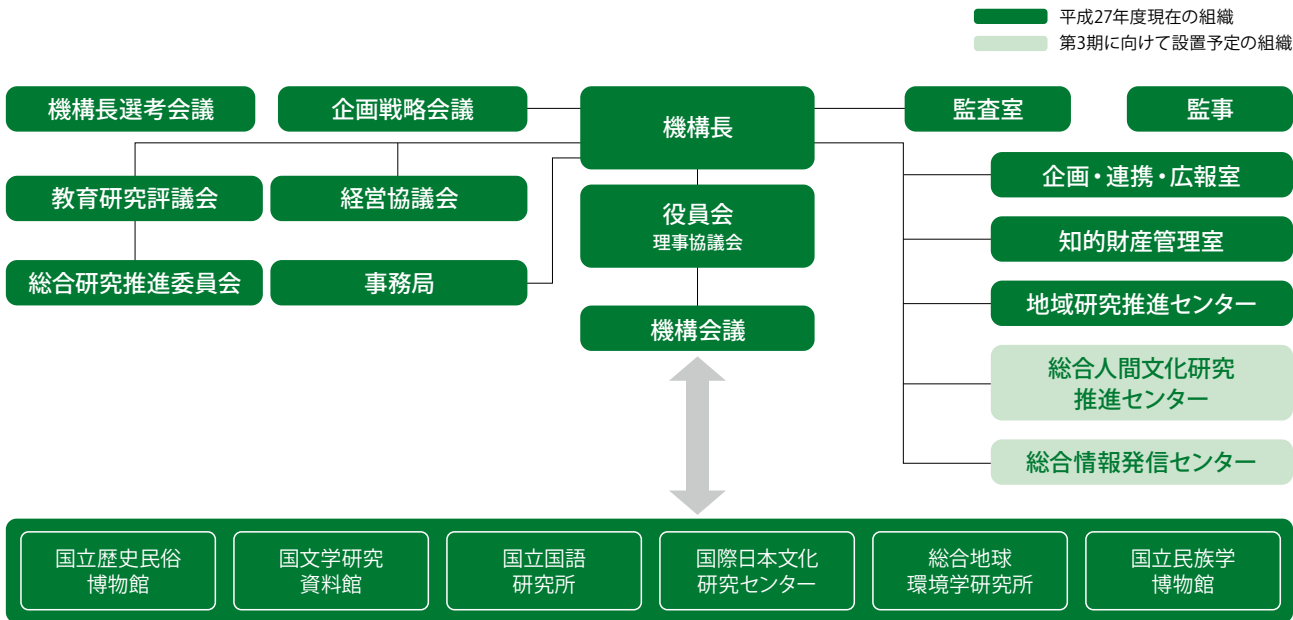
第3期に向けた機構組織の改編

機構法人発足後10年の軌跡を踏まえ、機構法人としてのガバナンス（協治）機能をさらに強化するため、機構本部の事業と機関の研究プロジェクト等にかかわる研究戦略を立案し推進していく中核的な役割を担う「総合人間文化研究推進センター」を設置します。

機構の一番大きな役割は発信、広義の広報という考えから、情報資源の共有化、人間文化研究の重要性を社会にアピールする情報発信機能の強化を図る「総合情報発信センター」を設置します。

また、機構会議、役員会、その他機構の重要会議に提出する議案およびその議案に基づく業務執行等について常時協議する「理事協議会」を平成26年4月から発足させています。

そして、機構の組織・運営に関する重要施策の策定、調整に必要な調査・審議を行う「企画戦略会議」を立ち上げました。機構外の有識者として経営協議会、教育研究評議会から3名ずつ加わっていただき、機構長、理事4名、機構長特別顧問、事務局長の計13名から構成されています。





国立歴史民俗博物館

NATIONAL MUSEUM OF JAPANESE HISTORY

国立歴史民俗博物館（歴博）は、日本の歴史と文化に関する研究を推進するために設置された、博物館という形態の大学共同利用機関です。未来を切りひらく歴史的展望の獲得と、歴史認識を異にする人々の相互理解の実現に寄与することを使命として、資源・研究・展示という要素を有機的に連鎖させ、積極的に共有・公開する研究スタイル「博物館型研究統合」を通して、国内外の研究者等との学際的な共同研究や人文社会科学と自然科学を含む関連諸学との融合等、大学共同利用機関の特徴を活かした新しい研究を推進しています。



研究

歴博では、国内外の大学、研究所等のさまざまな研究分野の研究者が、共通の研究課題のもとに研究プロジェクトを組織しています。

「共同研究」には3つのカテゴリーがあります。基幹研究は大きな研究課題のもとに学際的研究をめざす課題を設定したもので、基盤研究は所蔵資料の高度情報化や、新しい歴史研究の方法論的基盤の形成等を課題とするものです。この2つを「共同研究」の核としながら、開発型共同研究では、新規課題の発掘と人材育成を目的として実施することとしています。

なお、平成26年度の実施件数は、基幹研究6件、基盤研究12件、開発型共同研究1件です。

また、所蔵資料を有効に利用するための研究として、「資料調査研究プロジェクト」を3件実施しています。さらに、総合展示、企画展示、特集展示等の展示構築のため、「展示プロジェクト」を16件実施しています。



共同研究「日韓における青銅原料の産地の変遷に関する研究」による海外調査／韓国・義城・尹蔵里古墳群（東亜細亜文化財研究院）

共同研究などの成果は『国立歴史民俗博物館研究報告』として刊行するとともに、研究情報を網羅した『国立歴史民俗博物館年報』、展示図録、資料目録などを刊行しています。

共同利用

資料収集

歴博では、実物資料・複製資料・音響映像資料およびこれに関連する資料を計画的・継続的に収集しており、平成26年5月現在、238,385点（うち国宝5点、重要文化財85点、重要美術品27点）を収蔵しています。また、蔵書冊数は325,401冊です。

データベースの公開

収蔵資料を広く公開し、研究利用に資することを目的とした館蔵資料データベース、諸分野の文献目録や共同研究の成果を収録したデータベースおよび記録類全文のデータベースを提供しています（平成26年5月現在46本）。

展示

■総合展示

総合展示は、日本の歴史と文化の流れの中から選んだ重要なテーマを、生活史に重点を置いて6つに分けて構成しています。第1から第3展示室は、原始・古代から近世までを対象としています。第4展示室は民俗展示、第5と第6展示室は近現代史です。なお、第3、第4展示室では特集展示を行います。

■企画展示

共同研究および資料収集の成果を公開するために年に数回の企画展示を行います。

■くらしの植物苑

くらしの植物苑では、「食べる」「織る・漉く」「染める」「治す」「道具をつくる」「塗る・燃やす」のテーマで、生活文化を支える植物を系統的に植栽し、これらから見えるくらしの歴史を展示しています。また、特別企画として伝統的に栽培された園芸植物などに関する「季節の伝統植物」を開催しています。毎月1回は観察会を行います。



特集展示「江戸図屏風と行列」

社会連携

歴博では共同研究などの成果を、展示だけでなくさまざまな普及活動を通じて社会に還元しています。

歴博フォーラム・講演会の開催

研究成果を広く一般に公開する「歴博フォーラム」と「歴博講演会」を開催しています。



歴博フォーラム「初春の馬」

子ども向け教育普及事業の実施

学習キット「れきはこ」を使って、体験しながら学ぶ「たいけんれきはこ」の設置や、歴博の展示を見ながら設問に答える「れきはここどもワークシート」の提供など、子ども向け教育普及活動を実施しています。

専門職員研修事業などの実施

全国の歴史民俗系博物館や資料館専門職員活動の充実に資するため、文化庁と共催で「歴史民俗資料館等専門職員研修会」を開催しています。

歴史民俗系博物館の連絡体制の構築

東日本大震災を機に設立した「全国歴史民俗系博物館協議会」（加盟数 686 館）の幹事館・事務局館として、有事の際に機動的に対応するため、歴史・民俗系博物館の連携を促進するための活動を行っています。

情報発信

歴史系総合誌『歴博』の刊行、れきはこウェブサイト (<http://www.rekihaku.ac.jp>)、各種情報の配信、大学共同利用機関シンポジウムへの出展などを積極的に実施しています。

研究交流

国内外の大学・研究機関・博物館と学術交流を図るため、平成 26 年度までに 19 件の国際・国内交流協定を締結しています。

大学院教育

総合研究大学院大学の文化科学研究科（日本歴史研究専攻）が平成 11 年度に設置され、個別授業・基礎演習・集中講義の 3 つの形態の授業により、博士論文の作成指導と研究者としての能力の育成を図っています。

また、大学院教育の一環として、特別共同利用研究員制度を設けており、大学の要請に応じ歴史学・考古学・民俗学およびそれに関連する分野の大学院生を受け入れ、必要な指導を行っています。

第3期に向けて重点的に取り組む研究等

歴博は博物館を有する大学共同利用機関として機能を存分に発揮する独自の研究スタイルとして「博物館型研究統合」を提唱しています。第3期では、これを一層深化・新展開させます。そのため5つの課題を掲げます。①総合展示を間断なく新構築します。②環境・災害・戦争・都市・生業・宗教・マイノリティー・生と死・経済と格差等の諸課題に取り組みます。③総合展示を根幹とする歴史叙述を海外の歴史系博物館等と連携し展開します。④新総合研究棟を活用した文理融合による新領域を開拓します。⑤生涯学習および学校教育との連携を重視します。とくに重点的に取り組む研究課題は、「日本歴史のバックアップとメタ資料学の構築」および「日本の原始・古代史像新構築のための研究統合による年代歴史学の展開」です。



国文学研究資料館

NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERATURE

国文学研究資料館（国文研）は、日本文学研究の中核拠点として創設以来40年にわたって培ってきた日本の古典籍に関する資料研究の蓄積を活かし、国内外の研究機関・研究者と連携し、日本の古典籍を豊かな知的資源として活用する、分野を横断した研究の創出に取り組みます。また、日本文学および関連資料の調査・研究および収集・保存・公開等の事業を継続して実施するとともに、国内外の研究者・諸機関とも連携し、日本の文学と文化の特質を明らかにする先進的な共同研究を展開します。



研究

資料の調査研究と国内外の諸機関との研究交流に基づき、日本文学などの長期的視野に立った基礎研究の推進と新たな研究動向の推進を図るとともに、国際研究のあらたな研究の進展のため、基幹研究、特定研究、国際連携研究の3つのカテゴリーからなる共同研究を行っています。

また、これらの共同研究のために本館では外部委員が参加する共同研究委員会を設置し、各共同研究の計画や実施後の成果について評価を行い、その結果を研究の遂行に反映させ、よりよい成果を出せるようにしています。

共同利用

調査収集

全国の大学などに所属する研究者約200名の調査員と緊密に連携し、日本文学および関連する原典資料（写本・版本など）の所蔵先に赴き、書誌的事項を中心とした調査研究を行っています。この調査研究に基づき、撮影許可が得られた原典資料をマイクロネガフィルムまたはデジタル画像として全冊撮影することによって収集しています。

さらに、平成17年度から、他大学・他機関と締結した協定に基づく連携調査を行っています。

資料利用

閲覧室で閲覧・文献複写サービスを行っています。遠隔地の利用者でも、図書館間の相互利用制度により、資料の複写などのサービスが利用でき、電話で所蔵調査および文書での質問について受け付けています。また、収集した資料の一部は、本館ウェブサイトから閲覧も可能です。



閲覧室

公開データベース

「国文学論文目録データベース」「日本古典籍総合目録データベース」をはじめ、研究者にとって不可欠なツールである各種データベース（31件）による学術情報の提供を行っています。

社会連携

国文研では展示、講演、シンポジウム、セミナーなどを通じて、研究成果を広く社会に還元しています。

展示

国文研で行っている事業や共同研究の成果などを公開するため、展示を行っています。

平成25年度からは、利用者がいつでも展示を見ることができるように、日本の古典籍がどのように読み伝えられてきたのか展示を常設するとともに、特別展示、企画展示を適宜開催しています。

平成 27 年度通常展示 「書物で見る 日本古典文学史」

平成 27 年 4 月 1 日～9 月 30 日（予定）

上代から明治初期までの日本文学の歴史を、写本・版本等の現物資料を通して紹介します。単なる文学年表の視覚化ではなく、作品形成の基盤、ジャンルや作品間の影響関係などが見えるように展示します。本展示では、作品が成立した当時の本に限らず、後代の写本・版本も使用し、それによって作品が後の時代にどのような形で伝えられたのかもあわせて示します。



通常展示「書物で見る 日本古典文学史」ポスター

国際日本文学研究集会

国内外の日本文学研究者との交流を深め、日本文学研究の発展を図るため、毎年秋に開催しています。

平成 27 年 11 月に開催する第 39 回の研究集会において研究発表とシンポジウム「越境する日本文学（仮称）」を実施します。

国文研フォーラム

研究交流を促進するため、国文研の教員が研究成果を発信する国文研フォーラムを年間 10 回程度行います。

日本古典籍講習会

国立国会図書館と連携し、国内外で日本の古典籍を扱っている図書館や文庫の司書を対象とし、古典籍の基礎知識・取り扱いなどに関する講習会を開催します。

アーカイブズ・カレッジ

記録史料の保存と利用サービスなどの業務を担う専門職



アーカイブズ・カレッジ

員（いわゆるアーキビスト）の研修、養成のため、長期コースと短期コースを開催します。講師は国文研の教員などで、長期コースは 7 月～9 月の間の計 8 週間、国文研で開催し、短期コースは三重県総合博物館において 11 月に開催します。

「古典の日」講演会

11 月 1 日が「古典の日」と制定されたことをふまえ、同日に講演会を開催します。

大学院教育

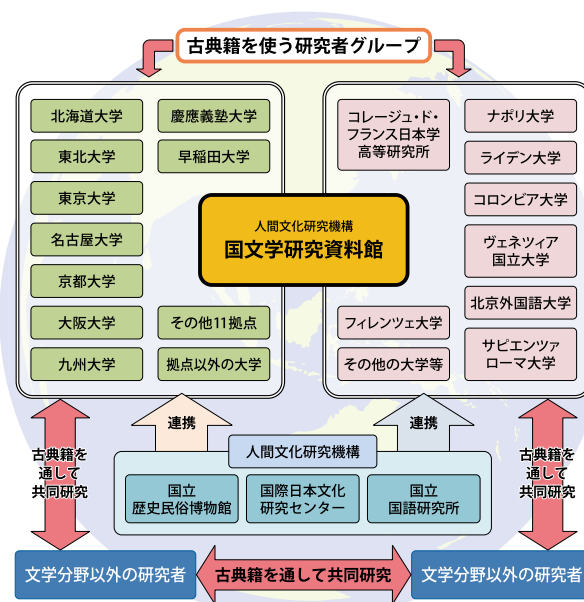
国文研には、総合研究大学院大学の文化科学研究科（日本文学研究専攻）が設置されています。総合研究大学院大学は、大学共同利用機関の人材と研究環境を基盤として、教育・研究を行っています。日本文学研究専攻では、従来の日本文学研究を、文化科学の視点から総合的にとらえ直す立場に立って、多面的な指導を行っています。

また、特別共同利用研究員制度により、大学の要請に応じ大学院生を受け入れ、研究指導に協力しています。

第 3 期に向けて重点的に取り組む研究等

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」

本計画は、国文研が中心となって、国内外の大学等と連携して、日本語の歴史的典籍約 30 万点を画像データ化し、歴史的典籍の学術研究に関する我が国で最大唯一のものとなる「日本語の歴史的典籍データベース」を作成するとともに、その画像を用いた研究を行う国際共同研究ネットワークを構築するものです。研究分野は人文学全体、さらには自然科学系の諸分野に及びます。



国際共同研究ネットワークのイメージ図



国立国語研究所

NATIONAL INSTITUTE FOR JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS

国立国語研究所(国語研)は、日本語学・言語学・日本語教育研究の国際的・総合的研究拠点として、日本語を世界諸言語のひとつと位置づけ、国内外の大学・研究機関と大規模な共同研究を展開することによって日本語の特質の全貌を解明しようとしています。

また、共同研究の成果や大規模な言語資源を広く社会に発信し、自然言語処理等さまざまな応用面に寄与することも重要な使命としています。



研究

国語研では、国内外の諸大学・研究機関と連携して、個別の大学ではできないような共同研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開しています。それらの土台となるのは「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」という研究所全体の研究目標です。この目標の達成に向けて研究テーマを定め、数々のプロジェクトを実施しています。

理論・構造研究系

現代日本語の文法・統語、音声・音韻、語彙・形態、意味・語用・談話、文字・表記にかかわる理論的・実証的・実験的研究を行っています。

時空間変異研究系

日本語の地理的・社会的変異、歴史的変化の様相を解明することを目標として、方言の全国調査、消滅危機方言の調査、現代日本語の動態の解明といった共同研究に取り組んでいます。

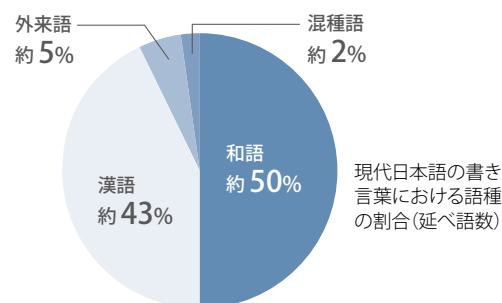


方言の聴き取り調査

言語資源研究系

日本語のコーパス(大量の言葉を電子化し、多方面での活用を可能にしたもの)の構築と、コーパスを活用した新しい日本語学に関する共同研究を実施しています。

コーパス(『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』)を使った調査の一例



言語対照研究系

日本語を世界の諸言語と比較することによって日本語の特質を明らかにすることを目標とし、国内外の研究者の参画を得て言語類型論的研究を行っています。

日本語教育研究・情報センター

第二言語(外国語)としての日本語の教育・習得をとりまくさまざまな今日的課題に対して、学習者の日本語コミュニケーションに関する実証的研究と、研究情報の収集・発信を行っています。

共同利用

研究情報資料センター

「日本語研究・日本語教育文献データベース」等の各種データベース類の構築とウェブサイトでの公開を進めるとともに

に、『国語研プロジェクトレビュー』『国立国語研究所論集』等を刊行しています。

コーパス開発センター

言語資源研究系と密接に協力して、現代・近代・古典の各種コーパス等を開発・公開しています。

研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書室で、日本語学・日本語教育・一般言語学等の研究文献・言語資料を収集・所蔵し、共同利用に供しています。

社会連携

特色ある研究をととした社会とのつながり

■消滅危機方言の調査・保存・分析

平成 21 年にユネスコが発表した世界各地の消滅危機言語リストには、日本国内の 8 つの言語(方言)が含まれています。これらの諸方言を集中的に記録・分析し、世界の危機言語研究に貢献すると同時に、我が国の言語文化を守り、地域社会の活性化に寄与することをめざしています。

■多文化共生社会での日本語教育研究

近年、日本で生活している外国人や留学生の増加に伴って日本語学習に対するニーズが多様化しています。第二言語(外国語)としての日本語のコミュニケーション能力の教育・習得に関する実証的研究によって、日本語教育・学習の内容と方法の改善や、異文化摩擦等の社会的問題の解決に資する成果を提供します。

イベントを通じた社会への発信

国語研では、優れた研究成果を社会に発信・還元するために、専門家向けの国際シンポジウム、講習会等を開催するとともに、フォーラムや講演会、研究所公開等、各種の一般向け企画を実施しています。



一般向け講演会・NINJALフォーラム「世界の漢字教育—日本語漢字をまなぶ—」



一般公開イベント「ニホンゴ探検2014—1日研究員になろう!」

大学院教育

平成 17 年度から、一橋大学との連携大学院プログラムを実施しています。この連携大学院は、日本語教育学、日本語学、日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することをめざしています。

また、最新の研究について大学院生等に教授することにより、次代の研究者育成に寄与することを目的とした NINJAL チュートリアルを実施しています。

第 3 期に向けて重点的に取り組む研究等

日本語資源のコーパス化と公開

日本語を人類が誇る言語資源と捉え、大量の言語データを電子的に検索可能なコーパスとして公開することを進めています。すでに公開されているコーパスには、日本語研究のみならず情報処理技術の開発やマスメディア等、多方面で利用されている『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』等があります。それらに加えて、100 億語規模の超大規模コーパス、歴史的な日本語のコーパス、学習者発話コーパス、危機方言コーパス等の計画・開発に取り組んでいます。

日本語研究の国際化

日本語研究の国際的研究拠点としての重要性を高めるとともに、日本語の国際的普及に寄与するため、オックスフォード大学や台湾中央研究院等との研究連携や国際シンポジウムの開催等、多様な国際連携活動を進めています。また、言語学関係の出版社として世界をリードするドウ・グロイター・ムートン社との協定のもと、日本語および日本語言語学の研究に関する包括的な英文ハンドブック、Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズを順次刊行しています。



国際日本文化研究センター

INTERNATIONAL RESEARCH CENTER FOR JAPANESE STUDIES

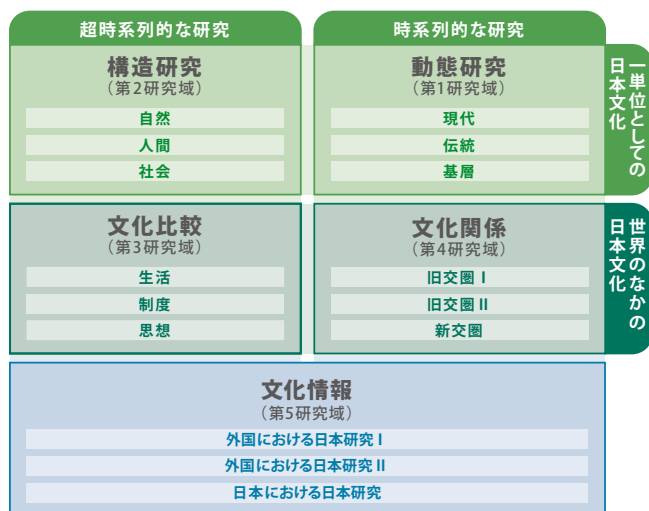
国際日本文化研究センター（日文研）は、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究と世界の日本研究者に対する研究協力・支援を目的とする研究機関です。日本研究に関する国際研究拠点というミッションに従い、国際共同研究を更に推進します。また、外国語で書かれた日本研究書籍や生活習俗に関する画像資料を重点的に収集し、次世代型データベースシステムの開発を行うとともに、日本文化研究者の国際的な育成を図り、次世代型グローバル日本文化研究の拠点形成をめざします。



研究

日文研における研究活動は、個人研究と共同研究を中心に行われています。このうち、共同研究には、日本文化の全体像を把握するための視座として5つの研究域を設け、次に各研究域を分節していくつかの方向を特定する研究軸を設けています。

また、研究協力活動として、外国人研究者の受け入れ、研究交流を目的とした国際シンポジウムの開催、蓄積してきた研究情報の提供を行っています。



研究域・研究軸

共同研究

日文研がもっとも力を入れているのは、共同研究方式の日本文化研究です。日本文化研究のためには、専門分野ごとの成果を着実に積み重ね、あわせて専門分野の枠組みを越えて研究者が相互に知見を高め合う場が必要です。

また、日本と異なる知的伝統に立つ海外の研究者との交流も重視して、日本文化研究の多角的な国際化を図ります。このように、単なる研究成果の交流にとどまらず、研究過程を共有しあうことによって生みだされる創造性に基づく成果をめざしています。

平成26年度は、大衆文化（ポピュラー・カルチャー）に関する研究課題5件を含む、計16件（うち2件は国際共同研究会）の共同研究を行いました。

国際研究集会

日本の文化、社会に対する世界各国の関心の高まりにともない、多様化する研究者の問題意識、研究方法に対応するため、主として日文研での共同研究をテーマに国際研究集会を開催し、日本研究発展のための国際的な討論の場を設けています。

国内開催の研究会

来日中の外国人研究者に研究発表と交流の場を提供することを目的に、毎月、京都市内にて日文研フォーラムを開催し、一般にも公開しています。

また、毎月、日文研にて教員や外国人研究員の研究発表と国際交流を兼ねたセミナーとして、日文研木曜セミナー、Nichibunken Evening Seminarを開催しています。

そのほか、教員



第279回日文研フォーラム

が専門領域のテーマを設定したり、外国人研究者と教員が協力して学際的なテーマで開催するレクチャーやシンポジウムがあります。

海外開催の研究会

海外においても研究活動・研究協力活動を行うため、年1回「海外シンポジウム」を開催しています。平成26年度は日文研において「新領域・次世代の日本研究」を開催しました。

また、海外における日本研究の研究者ネットワークを構築するため、教員を年数回海外に派遣し、海外シンポジウムより少人数による研究発表会や中規模なシンポジウム、意見交換を行っています。あわせて、現地の優秀な若手研究者の発掘、海外の日本研究の生の情報を得る機会となっています。

共同利用

図書館

図書館では、日本研究に必要な各種資料を幅広く収集し、研究者の利用に供するとともに、さまざまな情報提供に努めています。約51万冊の蔵書の所蔵状況はウェブサイトで検索することができ、他大学図書館などからの文献複写や貸借の申込にも対応しています。資料収集の重点のひとつは、外国語で書かれた日本研究図書および訳書の網羅的収集です。図書資料だけでなく、幕末明治期の彩色写真、古地図、ビデオテープ・DVD・CDなどの映像音響資料も積極的に収集しています。



「七福神:明治十六年略暦」

データベースなどの公開

日文研は、所蔵する日本研究資料、所員の研究成果をはじめ、他機関所有の日本研究資料などのデータベースを作成しており、現在^{*}53種類をウェブサイトで公開しています。

また、インターネット放送により、学術講演会などをリアルタイムで公開するとともに、平成9年度以降に行われた^{*}225本分の講演記録も公開しています。

(※平成26年12月現在)

社会連携

「社会に開かれた研究機関」として、研究活動・研究協力活動により得られた成果を広く社会に還元するため、以下のような普及活動を行っています。

出版物

日文研の学術研究成果である『日本研究』、*Japan Review*といった学術雑誌、および「日文研叢書」「Nichibun Monograph」などの学術研究成果出版物のほか、国内外で開催するシンポジウムなどの報告書を出版し、世界の研究機関に広く発信しています。

講演会

■ 年3～4回、日文研講堂において、日文研の教員による研究成果の発表と日本研究の普及を目的として学術講演会を開催しています。

■ 日文研で開催される国際研究集会の期間中に、普及活動・社会貢献の一環として、一般市民に向けた公開講演会を開催することもあります。

■ 平成26年度より、日文研と東京にある公益財団法人国際文化会館（アイハウス）が連携し、シリーズで多角的に現代日本や日本人理解を深める講演会を行う日文研・アイハウス連携フォーラムを始めました。

大学院教育

日文研には、総合研究大学院大学の文化科学研究科（国際日本研究専攻）が設置されており、国外からの留学生を含む大学院生が在籍し、国際的視野から学際的、総合的な日本研究を推進する教育と研究が行われています。

また、特別共同利用研究員制度により、大学の要請に応じて大学院生を受け入れ、研究指導に協力しています。

第3期に向けて重点的に取り組む研究等

国際的なネットワーク形成および国際拠点機能の強化につながるため、平成25年度から、メンバーの半数を海外に在住する研究者で構成する新たな国際共同研究を開始するとともに、現代文化の研究にも力を入れ、あらたな研究領域の開拓および国際的な日本文化研究者の育成を行います。

また、他機関で収集することが難しい外国語で書かれた日本研究書籍などのほか、散逸が危ぶまれる生活習俗に関する画像資料も重点的に収集します。そして、情報システムの更新により機能と容量を飛躍的に向上させ、世界の日本文化研究者に提供するための次世代型データベースシステムの開発を行います。

日文研を取り巻く諸状況の大きな変化を踏まえ、次世代型グローバル日本文化研究の拠点形成に向けて、これらの取り組みをより一層強化・充実していきます。



総合地球環境学研究所

RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANITY AND NATURE

総合地球環境学研究所(地球研)は、「地球環境問題の根源は、人間文化の問題にある」という認識に基づき、地球環境問題の解決に資する総合的研究を行っています。そのために、国内外の自然科学系と人文学・社会科学系の研究者との協働に加え、市民社会とも連携を図りながら共同研究を実施し、問題を全体、総体として把握し、未来のあるべき姿を模索する「設計科学」を推進しています。地球環境問題に関する統合知を構築する地球研の「総合地球環境学」は、地球に生きる人間の生き方そのものを問うものです。



研究

地球研における研究は、プロジェクト方式で進められています。研究プロジェクトは、企画から、計画の妥当性、実行の可能性、成果の意義について、所内外から厳正かつ建設的な評価を受けます。

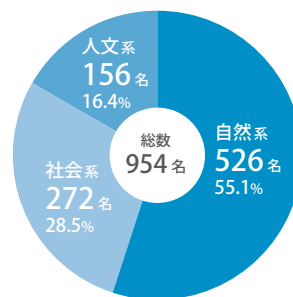
地球研の研究プロジェクトには三つのタイプがあります。「個別連携プロジェクト」は国内外から公募によって採択されるものです。単独の大学では実施の困難な、多くの優れた研究者を巻き込む独創的な構想が期待されています。「未来設計プロジェクト」は、「総合地球環境学」の構築に向けて、地球研のイニシアティブによって立ち上げるものです。地球研の研究蓄積から最新の課題を導き、国内外の研究者の協力を経て実施します。さらに「機関連携プロジェクト」を開始しました。大学共同利用機関としての役割を強化し、国内の大学等との密接な連携を前提としたプロジェクトを実施しています。

これまでの研究プロジェクトの成果が認められ、地球環境研究に関する国際的な枠組み Future Earth では、アジア地域の拠点に指定されました。

共同利用

知のコモンズ

研究プロジェクトには自然科学系から人文学・社会科学系まで、非常に幅広い学問分野から約 1,000 名の研究者が参加しています。大型の設備や図書を共同利用するだけでなく、知識や考え方を持ち寄って「共同利用」するユニークな研究所です。研究者コミュニティに開かれた「知のコモンズ」としての役割を担っています。



平成25年度研究分野構成比率
[平成26年3月31日現在]

フィールドの協働作業

地球研の研究はフィールド重視です。国内はもとよりアジアを中心に世界各地で研究活動を展開しています。海外での共同研究は、企画から成果の発信まで、地元研究者・機関とまさに一体となって行います。協働作業で蓄積された信頼と経験は地球研の財産です。こうした共同研究の経験とネットワークを活かし、国内の関連研究機関と連携して、地域・環境に関する情報の共有化も進めています。



調査風景(台湾ベニヒノキからのサンプリング)

施設と機器の共同利用

地球研では、人と自然のつながりをとらえる技術の開発とそれを用いた環境診断はとりわけ重要だと判断し、最先端の

安定同位体測定機器を備えています。各地の大学と連携しながらあらたな学問領域「安定同位体環境学」をひらきます。

社会連携：設計科学

地球研では、研究者だけでなく地球環境問題にかかわる当事者と、さまざまな場面での連携を図っています。地球研フォーラム、地球研市民セミナー、地球研地域連携セミナーなどはそのような場の一つです。平成26年度からは、さまざまな高校と連携して協働で研究活動を行っています。

地球環境問題に必要なのは、事実命題を問う認識科学思考だけでなく、価値判断を問う「設計科学」的思考です。認識科学は「～である」かどうかを問題にしますが、「設計科学」は「～であるべき」かどうかを考えます。大胆に言い換えれば「望ましい社会」とは何かを探求することです。そのため単に研究成果を還元するだけでなく、研究そのものを一般社会と共に企画し（Co-Design）、共に練り上げ（Co-Produce）発信していきます。

主なイベント

■地球研フォーラム

地球研の理念や研究成果に基づいて、地球環境問題について幅広い問題提起やディスカッションを行うことを目的に開催しています。

■地球研市民セミナー

地球研の研究成果や地球環境問題の動向をわかりやすく一般市民に紹介することを目的に、京都市内の会場において定期的に開催しています。

■地球研地域連携セミナー

世界や日本の各地域で共通する地球環境問題の根底を探り、解決のための方法を考えていくことを目的に、地域の大学や研究機関などと連携してセミナーを開催しています。

■地球研オープンハウス

広く地域の方々との交流を深めるために、キッズセミナーやプロジェクト訪問など、地球研の施設や研究内容を紹介するオープンハウスを実施しています。



地球研オープンハウス(平成26年度)

主な出版物

■ニューズレター『地球研ニュース』 (Humanity & Nature Newsletter)

地球研として何を考えているのか、またどのような所員がいて、いかなる研究活動をしているのかなどの最新情報を、研究者コミュニティに向けて発信するものです。

■地球研叢書

地球研の研究成果を学問的にわかりやすく紹介する出版物です。

■地球研和文学術叢書「環境人間学と地域」

地球研の最新の研究成果を発信する研究者向けの出版物で、平成25年度より刊行を開始しました。

■地球研英文叢書 Global Environmental Studies

個別の成果を高度に統合し、地球研らしい研究の視点を国際的学術コミュニティに提示するための出版物です。

大学院教育

地球研では、複数の大学との連携協定に基づき、大学院生の受け入れ、フィールドにおける研究指導、授業科目の担当、学位授与審査等、実質的な大学院教育を行い、人材育成に貢献しています。ことに研究プロジェクトを連携して進めている名古屋大学とは、平成22年度から同大学大学院環境学研究科の大学院生の研究指導に連携大学院方式で協力しています。このほかにも、大学院生を特別共同利用研究員として受け入れ研究指導を行ったり、博士課程修了後の若手研究者をプロジェクト研究員として積極的に採用し、研究プロジェクトにおける研究に加えて企画・運営や異分野研究者との交流へも参画させるなど、専門性に加え、学際性を備えた人材を育成しています。

第3期に向けて重点的に取り組む研究等

地球研では、「設計科学」をさらに深く探求し、「総合地球環境学」の構築を進めます。そのために、これまでの地球研の研究蓄積をふまえ、とくにアジアを中心に研究を展開します。アジアは多様な自然、文化、価値観を有するとともに、近年急速に経済発展とグローバル化が進行し、世界の他の地域では見られない都市化の進行や土地利用の急激な変化と生業の転換、さらには人口の流動化、少子高齢化、経済・社会格差などの問題が顕在化しています。一方で、津波などの自然災害に加え、温暖化による災害リスクも増大しています。こうした現代的な社会の問題をふまえて総合的に地球環境研究に取り組み、研究者、市民社会などとのさまざまな対話を通じて、あらたなあるべき社会を模索します。

国立民族学博物館

NATIONAL MUSEUM OF ETHNOLOGY

国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館を持つ文化人類学・民族学の研究所です。国際的な研究・共同利用拠点として世界各地の民族や社会・文化に関する研究や展示の国際的展開、および本館が所蔵する文化資源の国際的共同利用を進めています。国際共同研究と国際連携展示をより一層推進し、その成果に基づいて人類の文化資源に関するバーチャルな「フォーラム型情報ミュージアム」を創りだし、文化資源に関する情報の共有と共同利用を世界規模で行います。



研究

研究組織

民族社会研究部、民族文化研究部、先端人類科学研究部の3研究部と、研究戦略センター、文化資源研究センター、国際学術交流室があります。

機関研究

学術的、社会的要請に応えるために、分野横断的で先進的な課題を取り上げます。また、共同研究の国際化および国内外の研究機関との制度的連携を図ることにより、研究の高次化を推進するものです。平成26年度は「包摂と自律の人間学」「マテリアリティの人間学」の2領域のもとに4つのプロジェクトを展開しました。

共同研究

文化人類学・民族学および関連分野の特定のテーマについて、みんぱく内外の専門家が共同で行う学際的研究で、毎年度約40件実施しています。

各個研究

研究者個人が自由な発想に基づいて企画、立案し、実施する研究であり、みんぱくの研究活動の基盤になるものです。

研究成果の公開

■出版活動

研究成果を広く公開するために、『国立民族学博物館研究報告』『Senri Ethnological Studies (SES)』『国立民族学博物館調査報告「Senri Ethnological Reports (SER)」』『国立民族学博物館研究年報』『国立民族学博物館論集』『民博通信』を

出版しています。また平成26年度はみんぱくの刊行奨励制度を利用した出版物3点（平成26年12月現在）が商業出版物として刊行されました。

■研究成果公開プログラム

研究成果を広く公開し社会還元を図る目的で、国際シンポジウムなどの国際研究集会を国内外で実施しています。平成26年度は25回（平成26年12月現在）実施しました。



国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」

共同利用

34万点の標本資料を所蔵し、研究や大学教育への活用およびほかの博物館への貸付など共同利用に供しています。

図書室

文化人類学・民族学関係の資料を収集している専門図書室です。日本語資料約26万冊および外国語資料約39万冊を所蔵。図書館間相互利用制度をとって文献複写・現物貸借を行っており、教育・研究活動を支援しています。

データベース

みんぱく所蔵の標本資料や映像・音響資料、文献・図書資料などの目録情報はじめ、「韓国生活財データベース」「音楽・芸能の映像データベース」などをウェブサイトで公開しています。

展示

■本館展示

世界を9地域に分けた地域展示と、音楽・言語の通文化展示を常設しています。現在、新構築に着手しており、平成26年度は、南アジア展示、東南アジア展示を新しくするとともに、今日的な問題や先端の研究課題などを紹介する企画展示では、「みんぱくおもちゃ博覧会—大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』展、「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」展を開催しました。

■特別展示

特別展示は、特定のテーマに関する最新の研究成果を総合的・体系的に紹介する大規模な展示で、平成25、26年度は、国立民族学博物館創設40周年記念・日本文化人類学会50周年記念特別展「イメージの力—国立民族学博物館コレクションにさぐる」を国立新美術館（平成26年2月19日～6月9日）とみんぱく（平成26年9月11日～12月9日）で開催しました。



特別展「イメージの力」展

社会連携

学術講演会

異文化理解のための講演会を開催しています。平成26年度は、公開講演会「無形文化遺産 選ぶ視点 選ばれる現実」、「いやし旅のウラ？表？—現代アジアツーリズム考」を実施しました。

国際連携

12カ国・地域、19の研究機関と学術研究交流を目的とした協定を締結し、共同研究を実施しています。さらに、博物館運営の実践的技術研修のため国際協力機構（JICA）課題別研修「博物館とコミュニティ開発」を実施し、各国文化の振興に貢献できる人材を育成しています。

広報出版

『月刊みんぱく』『MINPAKU Anthropology Newsletter』などの定期刊行物、ならびに『国立民族学博物館展示ガイド』、特別展示の展示図録や案内リーフレットなどの展示関連刊行物をととして、研究や展示などさまざまな活動を広報しています。

ゼミナール、ウィークエンド・サロン

みんぱくの教員などが最新の研究成果を講演する「みんぱくゼミナール」を毎月第3土曜日に、「みんぱくウィークエンド・サロン—研究者と話そう」を、ほぼ毎週日曜日に開催しています。

みんぱく映画会、研究公演

平成26年度は、文化人類学・民族学に関する映像資料などを上映するみんぱく映画会を10回開催しました。また、世界の諸民族の音楽や芸能などを紹介する研究公演を4回行いました。



研究公演「アリラン峠をこえていく」

学習キット「みんぱく」

世界の国や地域の衣装、楽器、道具、学用品などをスーツケースにパックした貸出用の学習キットです。14種類23パックを用意しています。

大学院教育

みんぱくには総合研究大学院大学の文化科学研究科（地域文化学専攻、比較文化学専攻）が設置されています。これまで、課程博士59名、論文博士30名を輩出しています。また、特別共同利用研究員の制度を設けて、他大学の大学院教育にも協力しています。

第3期に向けて重点的に取り組む研究等

創設以来40年にわたり世界の民族文化を研究し、多様な民族資料と関連する情報を集積しており、それらの有形・無形の資料や関連する情報を「人類の文化資源」として同時代の人々と共有し、かつ後世に伝えたいと考えています。この実現のために、複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら多様な文化資源について国際共同研究を推進します。その成果に基づき、多言語化された情報生成型データベースを構築し、また各種情報を統合することによって、グローバルな共同利用データバンクとしての「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアム」を創出し、情報の発信、交換、生成、共有を図る予定です。実施に際しては、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流にも注力していきます。

人間文化にかかわる総合的研究推進

21世紀における人類にとってもっとも重要で緊急の課題は、地球における人類の存続と、世界における人間の共生です。この難問を解く鍵は「文化」にあるとの認識に基づき、人文機構は人間文化研究の新たな領域を、従来の枠組みを越えて創出し、先端的・国際的な研究を展開するために研究活動を推進しています。

人文機構はこれらの活動をとおして、機構としての一体的な取組みを行いながら、さらなる研究活動推進体制の構築・拡充を図り、人間文化にかかわる総合的な学術研究の発展に寄与することをめざしています。

I. 連携研究

人文機構を構成する機関が培ってきた研究基盤と成果を、機関を越えてつなぎ、補完的、有機的に結合させることで、新たな視座を開拓し、より高次なものに発展させようと企画、実施してきたのが「連携研究」です。第2期中期目標期間では、中心となる連携研究の課題として、『『人間文化資源』の総合的研究』と「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」の2つのテーマを設定して研究を推進しています。

また、平成24年度からは、東日本大震災を契機として、新たに「大規模災害と人間文化研究」というテーマの研究を進め、各研究が最終年度を迎えています。

「人間文化資源」の総合的研究

(研究代表者：国立民族学博物館 久保正敏)

<http://www.minpaku.ac.jp/ningenbunkashigen/index.html>

本研究は、資源を人間とのかかわりにおいてとらえ、人類の歴史を多様な資源の開発と利用という観点から探求し、さまざまな時代や地域における実践や制度、観念や価値を資源活用との関連で再検討することを主題としています。ここで取り上げる「人間文化資源」とは、人間文化を対象とする諸科学の研究資料をさし、図書館・文書館の典籍(図書・書物)・文書資料や博物館の標本資料・映像音響資料はもとより、考古遺跡や歴史的建造物、祭礼・儀礼や伝統芸能なども含まれます。従来、これらを対象とする研究は人文社会科学諸分野において個々に取り組みされてきましたが、本研究では学問の枠組みを超えた学際的協働をとおして、あらたな学問領域の創出をめざし、文書資料・生活資料・映像資料のカテゴリーそれぞれに研究班が組織されています。

文章資料を扱う研究班

「正倉院文書の高度情報化研究」

(代表者：国立歴史民俗博物館 仁藤敦史)

「9-19世紀文書資料の多元的複眼的比較研究」

(代表者：国文学研究資料館 渡辺浩一)

生活資料を扱う研究班

「近現代における生活と産業変化に関する資料論的研究」

(代表者：国立歴史民俗博物館 青木隆浩)

映像資料を扱う研究班

「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」

(代表者：国立民族学博物館 福岡正太)

「歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究」(代表者：国立歴史民俗博物館 内田順子)

「人間文化資源の保存環境研究」

(代表者：国立民族学博物館 園田直子)

これらの活動の成果は、上記のウェブサイトで公開しています。

アジアにおける自然と文化の重層的関係の

歴史的解明

(研究代表者：総合地球環境学研究所 阿部健一)

http://www.chikyu.ac.jp/People_Nature/

日本を含めたアジアの自然は、われわれが想う以上に豊かで変化に富んでいます。アジアの多様な文化は、その自然とのかかわりのなかから生まれました。自然はときには慈母のように優しく、ときには厳父のように峻烈です。こうした自然から、われわれは何を感じて、どのように生活を守り、かつ彩り豊かなものにしてきたのでしょうか。

この問いを、(Ⅰ)言語世界から見た自然への認識と思想、言語表現の多様性と普遍性、(Ⅱ)自然の模倣と擬人化などを通じた「自然の文化への取り込み」と表象、(Ⅲ)森林・河川・沿岸域における自然の保全と利用上の慣行、の3つの側面から研究してきたのが本連携研究です。総合地球環境学研究所、国立国語研究所、国際日本文化研究センターが核となって組織しました。メンバーは専門分野も関心もそれぞれ異なるため、個別の研究よりも、合同研究会など、協働作業を重視するようにしました。

たとえば、国内のフィールドを相互に訪問、地元の方々と

セミナーを共催しながら、その地域に固有の自然と文化について議論を重ねたことがあります。戦後日本の人文系学会が、欧米とは一線を画した独自の人間科学のありかたを模索するため「九学会連合」を組織し、日本各地で共同調査を行いました。われわれが訪問したフィールドは、奇しくも多くが「九学会連合」の共同調査地でした。半世紀を経て、環境問題がその一つですが、既存の一つの学問だけでは対処できない課題が山積しています。その解決に向けて、再び日本の人間科学を再構築する必要があると実感しました。

研究連絡誌『人と自然』の発行も協働作業の一つです。毎号テーマを決め、分野横断的な論考を集めました。テーマは「火」「音」「虫」「天」「色」「花」「香」「風」など。力作ぞろいですので、新たな論考を加え、5年間の成果の一つとして、『五環：文化が誕生する瞬間（仮題）』という一冊の本に編み直すことにしました。



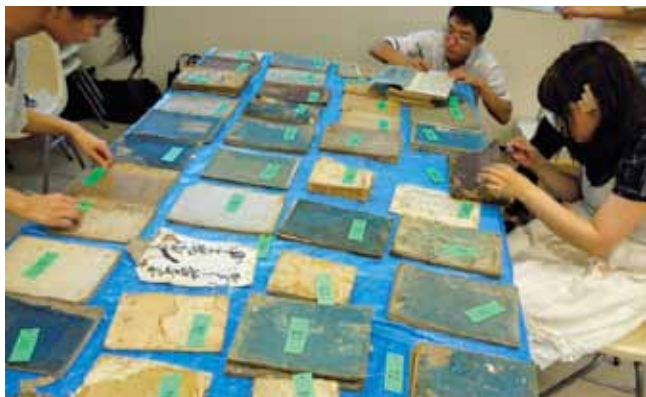
青森・三内丸山遺跡（平成26年7月28日 青森研究会での視察風景）

大規模災害と人間文化研究

（研究代表者：国立国語研究所 木部暢子）

<http://www.ninjal.ac.jp/shinsai/>

平成23年3月の東日本大震災以降も、大規模な災害が各地で起きています。人間の文化やそれを取りまく環境を研究する者として、災害にどう向き合うべきか。こうした問題意識のもと、平成24年4月にこのプロジェクトを開始しました。目指すのは「人間文化」という総合的な視点から地域の



福島第一原発近くの双葉町より運ばれた文書

文化や文化財の保全・再生を図ることです。3年間で行った活動は次のとおりです。

(A) 地域文化・環境と復興・再生：防災、環境保全、まちの歴史、文化遺産に配慮した地域づくりの提案や、方言をとおした災害時の地域社会支援と方言の保護・活用に関する活動。

(B) 大規模災害とミュージアムの連携、活用：被災した民俗資料の効果的な保存修復方法の開発や、文化遺産を災害から守るためのミュージアムの連携体制の構築。

(C) 大規模災害と資料保存・活用：被災した文書資料・紙資料の復旧活動や、復旧の方法・技術プログラムの開発とその指導。

これらの活動の成果は、『災害に学ぶ』（勉誠出版）の中で紹介しています。

II. 連携展示

人文機構は研究の成果を、刊行物・データベース・講演会・シンポジウムなどに加えて、展示によって迅速に国民に公開し、理解を進める、特色のある社会連携を行っています。とくに、国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館は大規模な展示施設を有し、常設展示・企画展示を行っており、平成25年からは国文学研究資料館も常設展示を開始しました。

人文機構の特徴を活かした展示のひとつとして、複数機関が連携して実施する「連携展示」を推進しています。

東日本大震災復興特別企画 みんぱくおもちゃ博覧会

大阪府指定有形民俗文化財「時代玩具コレクション」

（実施代表者：国立民族学博物館 日高真吾）

（主催：国立民族学博物館、東北歴史博物館）

本展示は、平成25年に国立民族学博物館に大阪府より寄贈された大阪府指定文化財「時代玩具コレクション」によって構成されています。本コレクションは、昭和50年代から収集されたコレクションであり、江戸時代以降の日本の玩具史の全容を知ることができるもので、日本のサブカルチャー



気仙沼市「海の市」での展示風景

を象徴するものの一つとして海外でも注目されている「マンガ文化」とも密接に関連しています。本展示では、「ブリキ製玩具」、「マスコミ玩具」、「カード玩具」、「盤上玩具（ボード玩具）」という4つのテーマに沿って「時代玩具コレクション」を紹介します。

また、本展示は、国立民族学博物館での展示にとどまらず、平成23年の東日本大震災後、本館が参加した文化財レスキューの地である、岩沼市の市民図書館 ふるさと展示室、石巻市の「まんがる堂」、石/森萬画館、気仙沼市の「海の市」および多賀城市にある東北歴史博物館で開催し、新たな人間文化研究の連携関係を結ぶものとなります。

Ⅲ. 研究資源の共有化

研究資源共有化事業では、機構6機関と地域研究の諸拠点が開発・蓄積した情報資源の学界での共有化を推進するために、研究資源共有化システムを開発・運用しています。本システムは、本6機関と地域研究推進事業の諸拠点の100を超えるデータベース（平成27年2月現在、149データベース）と国立国会図書館NDL Search（同、13データベース）を横断検索する統合検索システム（nihulNT：nihulNTegratedRetrievalSystem）、年代・時代情報や地理的位置・地名情報の分析のための時空間解析システム（GT-Map/GT-Time）から構成されています。平成23年度末に更新したnihulNTは、時空間検索機能の強化、研究分野別DBグループ設定・個別DBデータ一覧表示・検索語入力サジェッション機能の付加・人名一覧の表示などにより、検索環境高度化が図られています。GT-Map/GT-Timeでは平成22年9月から分析ツール「GT-Map/GT-Timeシステム」をフリーソフトウェアとして学界に提供しています。

さらに、平成26年度には、機構内機関と機構外の大学等との研究資源の柔軟な連携を実現するため、セマンティックWeb技術による技術検証を行い、第3期中期計画に向けた、研究資源共有化システムの機能強化について検討を開始しました。

また、日本研究、日本における人間文化研究の国際的発信のために、平成26年3月に国際リンク集を公開しました。

Ⅳ. 日本関連在外資料の調査研究

平成22年度より開始した日本関連在外資料の国際共同研究は、欧米などにおける日本文化研究の比重低下の打開と、日本文化の世界史的意義を明らかにすることをめざしています。これまでの各機関や研究者による研究テーマ別の調査研究から一歩進めて、人文機構に「日本関連在外資料調査研究委員会」を設置し、そのもとに一体的な研究体制をつくり、

多様な資料の総合的調査研究を推進しています。また、機構外の連携機関（東京大学史料編纂所・東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所、大分県立先哲史料館）などとともに海外機関との協力・協業による国際研究ネットワーク構築を進めています。第2期中期目標期間では、近世以降に日本から持ち出された資料群と近代以降の日本人の活動などにより海外に残された資料群という視点で、次の3つのテーマを推進しています。

シーボルト父子関係資料をはじめとする 前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての 基本的調査研究

（総括責任者：国立歴史民俗博物館 日高薫）

http://www.rekihaku.ac.jp/education_research/research/list/joint/2010/siebold/index-j.html

シーボルト（父子）関係資料のほか、海外に所在する19世紀の日本関連資料のいくつかについて、デジタル画像つき詳細調査目録を作成することで、今後こうした資料群の「共有資源」化を進める際の調査研究モデル構築をめざしています。シーボルト（父子）関係資料では、とくにシーボルトとほぼ同時期のオランダ商館員だったブロンホフ、フィッセルのコレクション、シーボルト（父）の再来日時収集資料および子どもたち（アレクサンダー、ハインリッヒ）にかかわるコレクションの総合的調査研究を行うことで、19世紀後半の日本関連在外資料の「規準」資料化を進めます。調査先は、ドイツのミュンヘン国立民族学博物館・ルール大学ボーフム・ベルリン国立中央図書館・ブランデンシュタイン城などです。ルール大学ボーフムなどの調査先では、毎年実施してきた古文書解読や「もの」資料調査研究のためのワークショップを継続開催する予定です。日本研究を志す欧米の若手研究者養成の一助になればと考えています。調査・研究の様子は、上記のウェブサイトで公開していますので、そちらもご参照ください。



ミュンヘン国立民族学博物館での調査風景

近現代における日本人移民とその環境に関する 在外資料の調査と研究

(総括責任者：国際日本文化研究センター 劉建輝)

<http://www.nichibun.ac.jp/~zaigai/>

平成 22 年度から 25 年度にかけて第一回 EAJIS 日本会議「日欧交流 500 年紀を前に——航路の形成と情報の拠点」や、人間文化研究機構第 22 回公開講演会「画像資料による日本人移民への新視点——満洲・ブラジル・南洋」といった国際シンポジウムを開催しながら、対象地域の調査活動等を行いました。各チームの活動として、中国チームは『日華学会関連高橋君平文書資料Ⅰ・Ⅱ』を刊行しました。アメリカ大陸チーム(a)(b)は北南米・ハワイの各所で資料調査を行う一方、「南米等邦字新聞データベース」を作成し、平成 23 年度より研究者向けに公開を開始し、また、『日系ブラジル移民文学Ⅰ・Ⅱ』を刊行しました。音声資料チームはハワイを中心としたオーラルヒストリー調査を行うと同時に、アメリカ大陸チーム(a)と合同での調査・ワークショップを実施し、チーム間の連携も深めています。韓国チームはワークショップやシンポジウムを開催し、『守屋栄夫関係史料』を取りまとめ、『帝国日本と植民地大学』を刊行しました。台湾チームは中央研究院台湾史研究所と共同で『堤村数衛関係文書選輯』を刊行しました。文化財保護チームは『関野貞大陸調査と現在』や『東方文化学院旧蔵建築写真目録』を刊行しました。

平成 26 年度は『満洲小事典』や旧植民地研究家故岡部牧夫の蔵書『岡部文庫』、そして『広辞苑』の編者である新村出がヨーロッパ留学した際の絵葉書コレクションなどの研究書籍・資料の執筆・編集を進めています。また、これまでに蓄積してきた研究成果(データベース含む)を日本の地域社会のみならず、世界の研究者へ向けて公開、発信しています。



「新興 満洲国視察」旅行パンフレット

バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書の保存・公開に関する調査・研究

(総括責任者：国文学研究資料館 大友一雄)

バチカン図書館との調査・公開に関する協定締結をふまえ、平成 26 年度から 1 万点余の日本切支丹文書の調査を本格化しました。研究では(1)概要調査を通じて、(2)図書館での史料保存と公開に協力するとともに、(3)文書全点のデ

ジタル撮影、(4)目録作成、(5)画像のウェブ公開をめざします。これらは内外の研究者、東京大学史料編纂所、大分県立先哲史料館、バチカン図書館と協力して行い、切支丹史料研究、異文化研究などのための情報基盤整備に努めます。



バチカン図書館での調査風景

V. 国際連携協力

人文機構は、人間文化研究にかかわる諸外国の研究機関との研究協力関係の構築を図り、外国人研究者招へい、研究者の海外派遣を進めるとともに、国外における国際研究集会・シンポジウムの開催やそれらへの研究者の参加を積極的に支援しています。平成 26 年度は、国文学研究資料館が主催する国際シンポジウム「近世都市における個人と集団の記憶」、国立民族学博物館が主催する第 3 回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム(SSLL3)「言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論」の開催を支援しました。

海外の研究機関との国際連携については、英国の芸術・人文リサーチ・カウンシル(AHRC)、ウェールズ国立博物館(NMW)、オランダの国際アジア研究所(IIAS)、ドイツのミュンヘン国立民族学博物館(SMV)、ルール大学ボーフム(RUB)、ブランデンシュタイン城(城主:コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン=ツェペリン氏)、バチカン市国のバチカン図書館(BAV)と機構が協定を締結し、研究協力を推進しています。

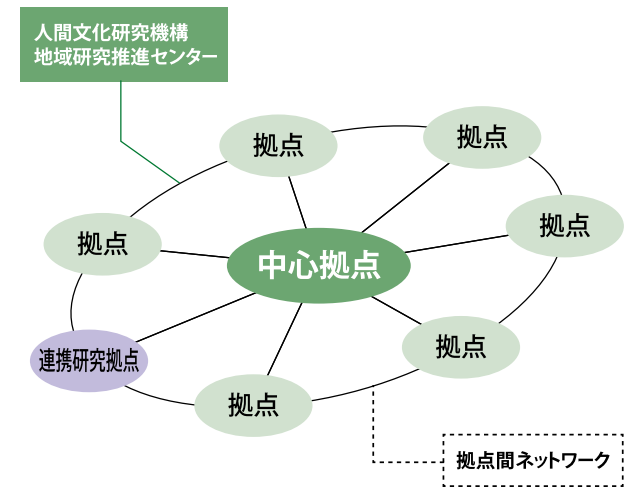
また、AHRC との協定に基づき、平成 26 年度は 4 名の英国の大学院生・若手研究者を受け入れ、研究指導を行うなど、日本研究を専攻する海外の若手研究者の育成にも寄与しています。

VI. 地域研究の推進

人文機構は、我が国にとって学術的、社会的に重要な意義のある地域を総合的に理解・解明するために、関係大学などと研究拠点を共同設置し、拠点間のネットワークを構築する

ことによって、地域研究を推進しています。人文機構の地域研究推進センターでは、各拠点の運営や共同研究の推進を担う研究者を「地域研究推進センター研究員」として採用し、各拠点へ派遣しています。

平成 18 年度からは「イスラーム地域」、平成 19 年度からは「現代中国」、平成 22 年度からは「現代インド」の地域研究を進めています。平成 24 年度からは、各地域研究の協働による連携研究も推進しています。



イスラーム地域研究

21 世紀における世界の動向、各地域・各国の政治・社会変動、石油資源の分配や経済開発、地域紛争の性格などを正しく理解するためには、イスラームと各地域のムスリム社会のあり方を実証的に明らかにすることが必要不可欠です。本地域研究では、イスラームを総合的に研究し、現代イスラーム世界に関する実証的な知の体系を築くことをめざしています。

拠点名 (★中心拠点)	早稲田大学イスラーム地域研究機構 イスラーム地域研究所
研究テーマ	「イスラームの知と文明」
所長	桜井啓子
拠点名	東京大学大学院人文社会系研究科附属 次世代人文学開発センター イスラーム地域研究部門
研究テーマ	「イスラームの思想と政治：比較と連関」
部門の長	菊地達也
拠点名	上智大学研究機構イスラーム研究センター
研究テーマ	「イスラーム近代と民衆のネットワーク」
センター長	私市正年
拠点名	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究 研究科附属イスラーム地域研究センター
研究テーマ	「イスラーム世界の国際組織」
センター長	東長靖
拠点名	公益財団法人東洋文庫研究部 イスラーム地域研究資料室
研究テーマ	「イスラーム地域研究史資料の収集・ 利用の促進と史資料学の開拓」
室長	三浦徹



アヤソフィア・モスクの内観(トルコ)

現代中国地域研究

中国は GDP で世界第 2 位の経済大国になりましたが、軍事を含む積極的な対外政策戦略を展開して、国際的な存在感を一段と高めてきています。「台頭する中国」は、日中関係に限らず、これからの世界を考える上でもっとも重要なテーマになってきています。現代中国を個別の研究分野の視点だけではなく、総体的にとらえる地域研究の意義は極めて大きくなってきているのです。

平成 25 年度からは、「現代中国の学際的研究——新しい大国をどうとらえるか」という共通テーマを設定して研究を進めています。



きれいな彫刻を施された門から一般市民の日常生活が見える、北京の胡同の一角(中国)

拠点名 (★中心拠点)	早稲田大学地域・地域間研究機構現代中国研究所
研究課題	「中国「超大国」化論の研究」
所長	天児慧
拠点名	京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター
研究課題	「中国近現当代史の重層構造」
センター長	石川禎浩
拠点名	慶應義塾大学東アジア研究所現代中国研究センター
研究課題	「移行期における政治と外交・安全保障」
センター長	高橋伸夫
拠点名	東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点
研究課題	「中国・東アジアの長期経済発展——工業化の軌跡と展望」
運営委員長	丸川知雄
拠点名	人間文化研究機構総合地球環境学研究所 中国環境問題研究拠点
研究課題	「グローバル化する中国環境問題と 東アジア成熟社会シナリオの模索」
拠点リーダー	窪田順平
拠点名	公益財団法人東洋文庫現代中国研究資料室
研究課題	「日本における現代中国資料の情報・ 研究センターの構築：資料の長期的系統的 分析による現代中国変容の解明」
室長	土田哲夫

《連携研究拠点》

拠点名	愛知大学国際中国学研究センター
研究課題	「日中関係変化の構造的変容に関する実証的研究」
所長	高橋五郎
拠点名	法政大学中国基層政治研究所
研究課題	「中国共産党に関する政治社会学的実証研究——中南海研究」
所長	菱田雅晴
拠点名	神戸大学社会科学系教育研究府現代中国研究拠点
研究課題	「中国における経済システムの持続可能性に関する実証的研究：『二重の罫を超えて』」
運営委員長	加藤弘之

現代インド地域研究

インドは現在大きく変動し、世界的な影響力を高めています。21世紀の世界の動向を理解するために、現代インドおよび南アジア地域の総合的な研究は不可欠です。こうした背景をふまえ、本地域研究は、現代インドの現在の動態と将来の展望について全国的かつ国際的に連携的な研究ができる組織体制と学術環境を整えることによって、インド世界の理解をめざしています。

平成27年度からは南アジア全体を研究対象地域とし、新たに「グローバル化する南アジアの構造変動—持続的・包摂的・平和的発展のための総合的地域研究」という共通テーマを設定して、第2期の研究を開始しました。

拠点名 (★中心拠点)	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 附属現代インド研究センター
研究テーマ	「南アジアの環境と政治」
総括代表	藤田幸一
センター長	田辺明生
拠点名 (★副中心拠点)	人間文化研究機構国立民族学博物館 現代インド研究拠点
研究テーマ	「南アジアの文化と社会」
拠点代表	三尾稔
拠点名	東京大学大学院人文社会系研究科附属 次世代人文学開発センター現代インド研究部門
研究テーマ	「南アジアの経済発展と歴史変動」
部門の長	水島司
拠点名	広島大学現代インド研究センター
研究テーマ	「南アジアの空間構造と開発問題」
センター長	友澤和夫
拠点名	東京外国語大学現代インド研究センター
研究テーマ	「南アジアの文学・社会運動・ジェンダー」
センター長	粟屋利江
拠点名	龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター 現代インド研究センター
研究テーマ	「南アジアの思想と価値の基層的变化」
センター長	嵩満也



現代インドを代表する商業集団
マールワリー
の故郷(インド)

VII. 情報発信

講演会・シンポジウム

人文機構では、機構6機関の研究成果ならびに連携研究や地域研究など人間文化にかかわる総合的研究の成果を広く社会に対して伝えるため、公開講演会・シンポジウムを開催しています。

人間文化研究機構第24回公開講演会

「世界の中の日本研究——京都から語る」
平成26年6月7日 有楽町朝日ホール(東京)

人間文化研究機構第25回公開講演会・シンポジウム

「グローバル・インドのいま——経済発展と民主政治」
平成26年11月2日 京都大学百周年時計台記念館
百周年記念ホール(京都)

刊行物

『人間文化』

公開講演会・シンポジウムの内容を記録した『人間文化』は、平成16年の設立記念公開講演会・シンポジウムより刊行を開始し、現在はvol.21までウェブサイト上で公開しています。
<http://www.nihu.jp/sougou/jouhou/publication/ningen.html>

『HUMAN』

人文機構が監修する人文学総合誌『HUMAN—知の森へのいざない』が平凡社より刊行されています。第6号(平成26年7月刊行)は「日本の魑魅魍魎」を特集し、巻頭では小松和彦氏(国際日本文化研究センター所長)と夢枕獏氏(作家)が「日本人は妖怪がお好き」をテーマに対談を行いました。

第7号(平成26年12月刊行)では「漢字の過去・現在・未来」を特集し、京都大学教授の阿辻哲次氏と作家の阿刀田高氏の対談の他、第一線の研究者の論考で、漢字のさまざまな面に光を当てています。

また、機構内機関のユニークな展示・コレクションや取組の紹介、リレー論考「自然と人間を考える」、「私の研究と出会い」などを連載しています。

日本研究功労賞

日本研究功労賞は、YKK 株式会社の協力のもと、海外の優れた日本研究者の顕彰をととして日本への理解を深めるとともに、海外での日本研究の興隆と促進につなげることを目的として、平成 23 年度に創設しました。この賞は、海外に在住し、日本に関する文学や言語、歴史や民俗・民族、文化や環境などの研究において学術上とくに優れた成果をあげている研究者に対して授与するものとしています。

第 4 回の日本研究功労賞は、イルメラ・日地谷＝キルシュネライト (Irmela Hijiya-Kirschner) 氏 (ベルリン自由大学教授) が受賞しました。授賞式は、平成 26 年 12 月 11 日に日本学士院で開催され、終了後にはイルメラ・日地谷＝キルシュネライト氏による記念講演「ヨーロッパから見た日本文学―芥川龍之介を例として」が行われました。



第4回日本研究功労賞授賞式



第4回日本研究功労賞記念講演風景

知的財産

研究活動によって生み出された成果は、社会のなかで蓄積・活用されることによって社会における知的財産を豊かにします。そこで人文機構では、知的財産管理室を設置して、研究過程で創出された知的財産を管理・運用し、社会に還元するための体制を整備しています。

知的財産管理室では、著作物を中心とした知的財産のうち、著作権などが機構に帰属するものを対象としてその管理を行っています。また、人文機構ならびに各機関では、関連研究分野に関する膨大な数の各種資料を収集して所蔵しています。これら資料の熟覧・貸与、使用許諾などに関しても、知的財産管理室を中心として対応しています。また、人文機構では特許を 2 件保有しており、平成 26 年度にも、あらたに 2 件出願を行いました。過去の研究資料を使用又は公開する際の個人情報の取扱などについて知識を習得するために、下記のようなセミナーを開催しています。



国立民族学博物館が考案した「展示ケース用の可搬型空気循環式恒温恒湿システム」

平成 26 年度開催セミナー

「資料の研究・公開と個人情報の利活用ルール」

平成 26 年 11 月 20 日 泉ガーデンコンファレンスセンター

講師：福井健策 (骨董通り法律事務所・弁護士)

「ニセモノの著作権がホンモノになる？」

―ゼロから学ぶ『疑似著作権』への対応―

平成 27 年 3 月 10 日 国際日本文化研究センター

講師：福井健策 (骨董通り法律事務所・弁護士)



知的財産セミナーの様子

機構役員

立本 成文	機構長
平川 南	理事
小長谷有紀	理事
佐藤洋一郎	理事
榎原 雅治	理事（非常勤）
広渡 清吾	監事（非常勤）
駒形 圭信	監事（非常勤）

各機関の長

久留島 浩	国立歴史民俗博物館長
今西祐一郎	国文学研究資料館長
影山 太郎	国立国語研究所長
小松 和彦	国際日本文化研究センター所長
安成 哲三	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長

経営協議会

立本 成文	機構長
平川 南	理事
小長谷有紀	理事
佐藤洋一郎	理事
榎原 雅治	理事
久留島 浩	国立歴史民俗博物館長
今西祐一郎	国文学研究資料館長
影山 太郎	国立国語研究所長
小松 和彦	国際日本文化研究センター所長
安成 哲三	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長
稲盛 豊実	稲盛財団専務理事
岩男壽美子	慶應義塾大学名誉教授
大原謙一郎	大原美術館理事長
岡田 泰伸	総合研究大学院大学長
嘉田由紀子	びわこ成蹊スポーツ大学長
佐村 知子	内閣官房「まち・ひと・しごと創生本部事務局」地方創生総括官補
高村 直助	東京大学名誉教授
武田佐知子	追手門学院大学教授
永井多恵子	ジャーナリスト
藤井 宏昭	国際交流基金顧問
藤岡 一郎	京都産業大学名誉教授
宮崎 恒二	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
望月 規夫	讀賣テレビ放送株式会社代表取締役社長
小池 良高	事務局長

教育研究評議会

立本 成文	機構長
平川 南	理事
小長谷有紀	理事
久留島 浩	国立歴史民俗博物館長
今西祐一郎	国文学研究資料館長
影山 太郎	国立国語研究所長
小松 和彦	国際日本文化研究センター所長
安成 哲三	総合地球環境学研究所長
須藤 健一	国立民族学博物館長
藤尾慎一郎	国立歴史民俗博物館副館長
寺島 恒世	国文学研究資料館副館長
木部 暢子	国立国語研究所副所長
井上 章一	国際日本文化研究センター副所長
佐藤 哲	総合地球環境学研究所プログラム主幹
岸上 伸啓	国立民族学博物館副館長
大塚柳太郎	自然環境研究センター理事長
窪田 幸子	神戸大学大学院国際文化学研究科教授
酒井 啓子	千葉大学法政経済学部長
佐藤 宗諄	奈良女子大学名誉教授
佐藤友美子	追手門学院大学特別任用教授
野家 啓一	東北大学教養教育院総長特命教授
森 正人	尚絅大学・尚絅大学短期大学部長
吉田 和彦	京都大学大学院文学研究科教授

企画戦略会議

立本 成文	機構長
平川 南	理事
小長谷有紀	理事
佐藤洋一郎	理事
榎原 雅治	理事
岩男壽美子	慶應義塾大学名誉教授
大塚柳太郎	自然環境研究センター理事長
大原謙一郎	大原美術館理事長
窪田 幸子	神戸大学大学院国際文化学研究科教授
野家 啓一	東北大学教養教育院総長特命教授
宮崎 恒二	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
大崎 仁	機構長特別顧問
小池 良高	事務局長

※各種委員会名簿は、人間文化研究機構のウェブサイトをご覧ください。▶▶▶ <http://www.nihu.jp/opendoor/committee/index.html>

資料 データー一覧

役職員数

機関	役員	館・所長	地域研究 推進センター 研究員	研究教育 職員	特定有期 雇用職員	事務・技術 職員	研究員	外国人 研究員	客員教員 (国内)
機構本部	7	0	21	0	1	27	0	0	0
国立歴史民俗博物館	0	1	0	38	2	42	0	0	8
国文学研究資料館	0	1	0	29	5	*37(2)	0	0	4
国立国語研究所	0	1	0	25	5	*25(4)	1	0	19
国際日本文化研究センター	0	1	0	27	2	34	0	14	13
総合地球環境学研究所	0	1	0	20	4	24	0	4	21
国立民族学博物館	0	1	0	55	0	*48(5)	0	6	20
計	7	6	21	194	19	*237(11)	1	24	85

(平成26年5月1日現在)

※ ()内は再任用職員数 (単位:人)

非常勤研究員等

種別	国立歴史民俗 博物館	国文学研究 資料館	国立国語 研究所	国際日本文化 研究センター	総合地球 環境学研究所	国立民族学 博物館	計
機関研究員	3	5	0	5	0	7	20
リサーチ・アシスタント	8	6	0	4	2	4	24
プロジェクト研究員	2	7	6	4	44	0	63

(平成26年5月1日現在)

(単位:人)

予算

収入	金額	支出	金額
運営費交付金	11,590	業務費	12,035
施設整備補助金	466	教育研究経費	12,035
補助金等収入	0	施設整備費	515
国立大学財務・経営センター施設費交付金	49	補助金等	0
自己収入	295	産学連携等研究経費および寄附金等	282
雑収入	295		
産学連携等研究収入および寄附金収入等	282		
目的積立金取崩	150		
計	12,832	計	12,832

(平成27年度)

(単位:百万円)

共同研究の件数および共同研究員数

機関名	共同研究 件数	総数	共同研究員の所属機関の内訳						
			国立大学等	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	左記以外
国立歴史民俗博物館	34	302	96	10	86	56	8	30	16
国文学研究資料館	9	92	28	2	34	13	4	1	10
国立国語研究所	32	418	185	22	132	11	3	41	24
国際日本文化研究センター	18	371	92	22	155	14	19	32	37
総合地球環境学研究所	29	760	301	31	104	57	20	218	29
国立民族学博物館	46	555	195	34	195	26	10	60	35
計	168	2,498	897	121	706	177	64	382	151

(平成25年5月1日現在)

(単位:件、人)

研究者の受入れ

種別	国立歴史民俗 博物館	国文学研究 資料館	国立国語 研究所	国際日本文化 研究センター	総合地球環境学 研究所	国立民族学 博物館	計
日本学術振興会特別研究員	2	3	2	2	2	6	17
日本学術振興会外国人特別研究員	1	0	1	4	0	1	7
その他の外来研究員	12	10	6	30	8	115	181
外国人研究員招へい	2	1	3	29	13	11	59

(平成25年度)

(単位:人)

外部資金の受入れ

機関名	科学研究費		受託研究		寄付金		その他の外部資金	
	採択件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機構本部	0	0	0	0	1	5,000	0	0
国立歴史民俗博物館	26(8)	86,900	1	229	1	3,001	0	0
国文学研究資料館	28(8)	91,740	0	0	44	7,407	0	0
国立国語研究所	39(22)	99,520	1	1,690	2	2,287	3	1,573
国際日本文化研究センター	14(4)	38,426	1	2,600	4	27,364	4	2,140
総合地球環境学研究所	32(12)	114,400	10	42,170	8	9,388	1	1,082
国立民族学博物館	55(21)	173,040	1	980	10	15,830	19	40,500
計	194(75)	604,026	14	47,669	70	70,277	27	45,295

(平成25年度) (単位：件、千円 カッコ内は新規分で内数)

協定締結一覧

機関名	締結国・地域数	締結機関数	おもな相手機関名（国名・地域名）
機構本部	4	7	芸術・人文リサーチ・カウンシル（英国）／国際アジア研究所（オランダ）／ミュンヘン国立民族学博物館（ドイツ）／バチカン図書館（バチカン市国）など
国立歴史民俗博物館	7	17	国立中央博物館（韓国）／国立文化財研究所（韓国）／中国社会科学院考古研究所（中国）／カナダ歴史博物館（カナダ）／ドイツ歴史博物館（ドイツ）など
国文学研究資料館	6	9	コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所（フランス）／北京外国語大学北京日本学研究中心（中国）／ライデン大学人文学部（オランダ）／ブリティッシュ・コロンビア大学文学部アジア研究学科（カナダ）など
国立国語研究所	4	4	マックスプランク進化人類学研究所（ドイツ）／オックスフォード大学東洋学研究所日本語研究センター（英国）／中央研究院（台湾）／北京日本学研究中心（中国）
国際日本文化研究センター	1	1	ドイツボツダム地球学研究所（ドイツ）
総合地球環境学研究所	20	32	セインズベリー日本藝術研究所（英国）／フランス人文科学館（フランス）／スウェン・ヘディン財団（スウェーデン）／農業畜産省ザンビア農業研究所（ザンビア）／北京大学（中国）など
国立民族学博物館	12	19	国立パリ・デカルト大学・人口開発研究所（フランス）／中国社会科学院民族学・人類学研究所（中国）／エジンバラ大学（イギリス）／ロシア民族学博物館（ロシア）／国立民俗博物館（韓国）など

(平成26年12月1日現在) ※人間文化研究機構本部および大学共同利用機関単位で協定書を締結しているものに限る、研究者個人や研究室単位での共同研究等は含みません。

大学院教育 総合研究大学院大学

	研究科	専攻	機関	学生数 (平成26年5月1日現在)	学位取得人数 (平成25年度)
後期3年博士課程	文化科学	地域文化学	国立民族学博物館	11(5)	0
		比較文化学	国立民族学博物館	14(4)	2
		国際日本研究	国際日本文化研究センター	19(9)	6
		日本歴史研究	国立歴史民俗博物館	9(1)	1
		日本文学研究	国文学研究資料館	10(1)	1
		計		63(20)	10

(平成26年5月1日現在) (単位：人)
(カッコ内は留学生で内数)

特別共同利用研究員数

国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国立国語研究所	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
4	6	4	5	1	3	23

(平成25年度) (単位：人)



Inter-University Research Institute Corporation
**NATIONAL INSTITUTES
FOR THE HUMANITIES**
GUIDEBOOK 2015







Inter-University Research Institute Corporation

NATIONAL INSTITUTES FOR THE HUMANITIES

Message from the President	29
Background and Purposes / The NIHU Vision and Mission	30
NIHU and the Six Institutes	31
Activities of the NIHU Institutes	32
National Museum of Japanese History	32
National Institute of Japanese Literature	34
National Institute for Japanese Language and Linguistics	36
International Research Center for Japanese Studies	38
Research Institute for Humanity and Nature	40
National Museum of Ethnology	42
Promotion of Research in the Human Sciences	44
I Inter - Institutional Research	
II Inter - Institutional Exhibitions	
III Resource Sharing	
IV International Collaborative Research on Japan - related Documents and Artifacts Overseas	
V International Collaboration and Cooperation in Research	
VI Area Studies	
VII Public Information Services	
NIHU Prize in Japanese Studies / Intellectual Property	47
Reference Materials	48

Cover: Detail from "Society finch and Peony," from Ikiutsushi shijyūhachitaka (color print).
National Museum of Japanese History collection.

Message from the President



The National Institutes for the Humanities (NIHU) is a comprehensive research hub for the humanities. Transcending traditional academic lines and incorporating the perspective of the environment, it brings together scholarship in the various fields of the human sciences with the aim of developing new paradigms of research for tackling the many difficult problems of the twenty-first century resulting from the complex interaction of the history of human affairs with the natural world.

NIHU is now in its twelfth year since its establishment and in the final year of its Second Medium-Term (six-year) Plan. Since 2014, we have been working to assess and sum up the experience gained over the past eleven years as well as to prepare for a new research system to be launched during the Third Medium-Term Plan starting with the coming fiscal year (April 2016).

NIHU serves as the umbrella organization for six inter-university joint-use institutions engaged in research in diverse aspects of the human sciences: The National Museum of Ethnology (Minpaku, located in Senri, Osaka); the National Museum of Japanese History (Rekihaku, in Sakura, Chiba); the International Research Center for Japanese Studies (Nichibunken, in the Katsurazaka neighborhood of Kyoto); the Research Institute for Humanity and Nature (RIHN, in the Kamigamo neighborhood of Kyoto), the National Institute of Japanese Literature (NIJL, in Tachikawa, Tokyo), and the National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL, in Tachikawa, Tokyo). Each of the institutes has researchers specializing in diverse fields, and each has developed a distinctive style of research. The institutes consider it their shared mission to achieve synthesis across different research fields, excellence in research and education, advancement of shared use and collaborative research functions, and promotion of close linkages with and contributions to society. They are all now engaged in efforts to build new paradigms for the human sciences.

In *Ningen Bunka Kenkyū Kikō no arikata* [A Model for NIHU], compiled in March 2013, NIHU sets forth its main areas of emphasis as (1) pursuit of new developments in integrated research, (2) promotion of linkages and collaborations with institutions overseas, (3) responses to the digital age, (4) strengthening of interactive linkages with society, and (5) training of young researchers to take the lead in the future. Strengthening these functions and contributing thereby to improvement of the quality of our intellectual community has been NIHU's basic policy. As we have acted to translate this policy into reality, our image of what needs to be done in the Third Medium-term Plan period has become more and more concrete. This year's Guidebook represents our interim report on progress toward what is envisioned in the Plan.

NIHU strives to take advantage of opportunities afforded by the Japanese administrative reforms that reorganized national universities and research centers into National University Corporations and Inter-University Research Institute Corporation. In order to enrich humanity, society, and the environment, and to reconstruct human culture creatively, we seek to transcend the old boundaries of academic disciplines, societies, and customs. We will be most grateful for your continued support and goodwill.

April 2015

TACHIMOTO Narifumi
President
National Institutes for the Humanities

Background and Purposes

Japan’s four inter-university research institute corporations make available—to researchers at public and private universities and research institutes in Japan and overseas—large-scale facilities and repositories of materials and information that would be difficult for individual universities and research organizations to maintain. Serving as “centers of excellence” (COEs) in their respective areas of scholarly research, they are in a position to facilitate effective collaborative research.

The National Institutes for the Humanities is one of these corporations. Founded on April 1, 2004, NIHU was initially made up of five inter-university research institutes in the humanities: the National Museum of Japanese History, the National Institute of Japanese Literature, the International Research Center for Japanese Studies, the Research Institute for Humanity and Nature, and the National Museum of Ethnology. On October 1, 2009, the National Institute for Japanese Language and Linguistics became the sixth institute to join NIHU. While conducting basic research to fulfill their respective founding purposes, these institutes interact in a complementary fashion, transcending the frameworks of previous scholarship. They make up a comprehensive inter-university research complex in which study in the human sciences is informed by the perspective of study of the natural environment.

NIHU is dedicated to the advancement of basic research on culture and its extensions in time and space, including empirical study drawing on vast repositories of cultural materials and theoretical study integrating the perspectives of the human sciences. It also aims to be a global center for comprehensive scholarly research in the human sciences, endeavoring to open up new research fields, including collaboration with various fields of the natural sciences.

The six member institutes, each serving as a center for nationwide research exchange, are kept accessible to the researcher community. They actively cooperate and collaborate with universities and research organizations and take initiatives in facilitating multifaceted joint research projects and shared use of research results.

Some of the NIHU institutes—the National Museum of Japanese History, the National Museum of Ethnology, and the National Institute of Japanese Literature—are equipped with museum functions and exhibit facilities. Taking advantage of their distinctive functions, these institutes collaborate in exhibiting research data and achievements and utilize their information-technology capabilities to make the information they generate available in and outside Japan, thereby contributing to the broader advance of scholarship.

The NIHU Vision and Mission

In the twenty-first century, we face important and urgent issues about how humankind and nature should coexist on our planet and how human beings should interact in the world. The human sciences hold the fundamental keys for coping with these problems. Fostering the development of healthy and affluent societies requires a fundamental reappraisal of the thrust of human civilization rather than reliance solely on science and technology, and NIHU must take a leading role in this endeavor.

We believe NIHU’s responsibility is to creatively rebuild

the knowledge and traditions humankind has accumulated, transcending the boundaries of academic disciplines, societies, and customs, and proposing new paradigms of research on human cultures oriented to problem solving toward the realization of truly affluent lives.

In the realization of this vision, the roles or missions shared by the six constituent institutes of NIHU are four: integration, excellence in research and education, enhancement of joint use and collaborative research, and linkages with and contribution to society.

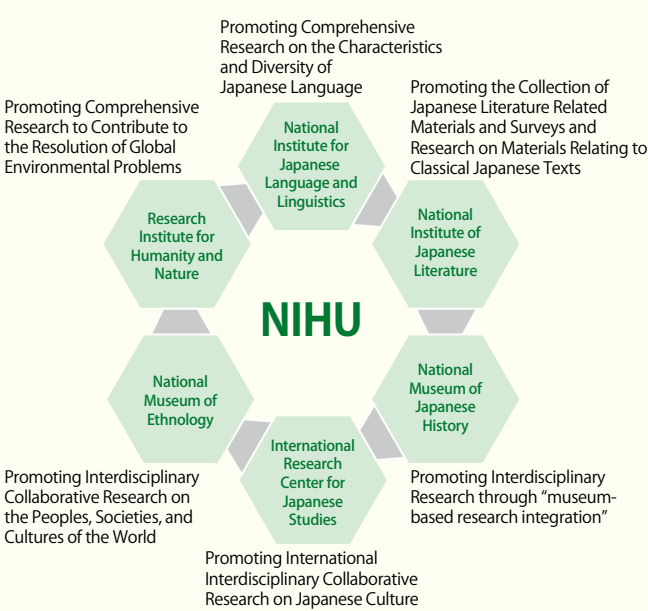
The NIHU Vision and Mission			
Integration NIHU will, while recognizing the diversity of values, offer approaches for understanding humanity and human cultures in comprehensive perspective and contribute to social development and the nurturing of creative identity.	Excellence in Research and Education NIHU will, while serving as a core research hub of global reach, contribute to the creation of education and research organizations capable of responding to social and cultural change.	Enhancement of Joint Use and Collaborative Research NIHU supports the strengthening and promotion of universities’ international research capabilities and the improvement of their research environments for that purpose. As part of that endeavor, it helps establish the environment for promoting the mobility of faculty members.	Linkages with and Contribution to Society By strengthening its information-transmission and promotional capabilities, NIHU will make the results of research in the humanities widely known. It is also engaged in projects contributing to society and generating information through its links with private corporations, NPOs, non-profit foundations, and other entities.

NIHU and the Six Institutes

The Direction of Linkages between NIHU and the Six Institutes

The six institutes of NIHU each have established their distinctive character in the course of their history—Rekihaku and Minpaku as museums, Kokubunken, Kokugoken, Rekihaku, and Nichibunken for Japanese studies, RIHN and Minpaku for research on the world. Nichibunken, which pursues the mission of the study of Japan by going beyond previously-existing limitations of domestic scholarship and reaching out broadly around the world, has many researchers from other countries on its faculty. NIHU’s task is to unite these diverse institutes, making the most of their respective characteristics, into an institutional whole.

As shown in the chart, the image of the collaboration between NIHU headquarters and the six institutes during the Third Medium-Term phase will be something like a ring of beads, not with the headquarters leading them all from above, so the linkages with the six institutes themselves create corporate integrity of NIHU.



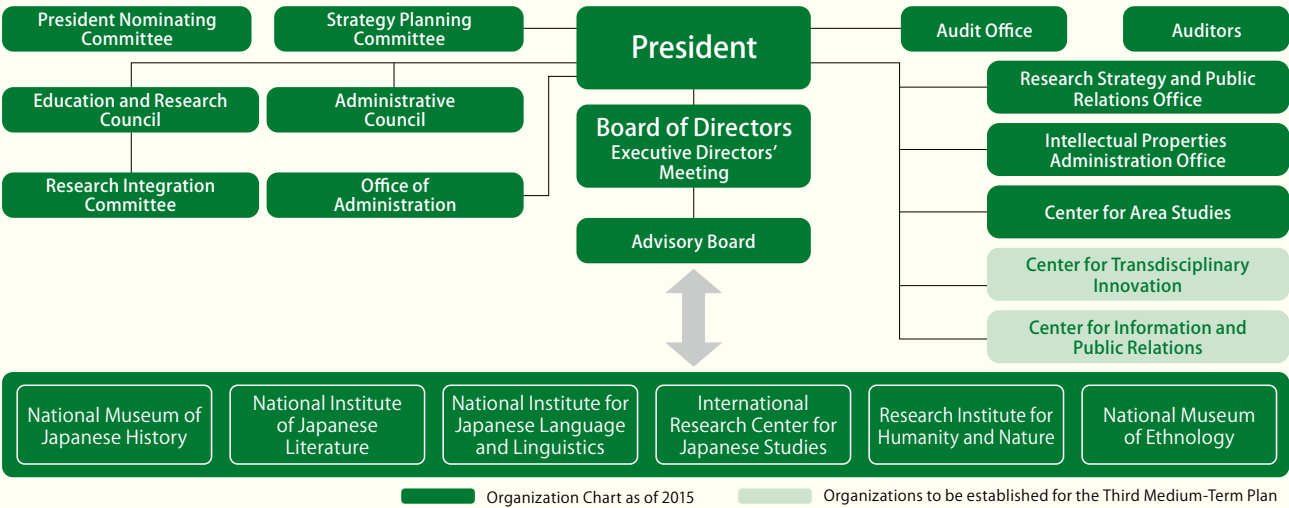
Organizational Changes

Reflecting the ten years of experience since its founding and in order to strengthen its governance as an inter-university research institute corporation, NIHU will establish the Center for Transdisciplinary Innovation Research, which will play a central role in planning and promoting research strategies relating to the programs of NIHU headquarters and the research projects of the six institutes.

NIHU’s most important role is in transmission of information and in public relations in the broad sense of the term. A Center for Information and Public Relations will be established to strengthen its capabilities for information resource sharing and urge society to recognize the importance of humanities research. In April 2014 the Executive Direc-

tors’ Meeting was founded to regularly discuss items for the agenda of the NIHU Advisory Board, Board of Directors and other key councils at NIHU and handle business related to those agenda items.

The Strategy Planning Committee, too, has been launched in order to study and discuss the drawing up and revision of important measures for NIHU’s organization and management. The Committee is composed of thirteen members, three members (opinion leaders from outside NIHU) each from the Administrative Council and the Education and Research Council, as well as NIHU’s president, four executive directors and a presidential special advisor, along with the head of the NIHU Office of Administration.





NATIONAL MUSEUM OF JAPANESE HISTORY

国立歴史民俗博物館

The National Museum of Japanese History (Rekihaku) is an inter-university facility in the form of a museum established to promote research on Japanese history and culture. Its mission is to attain a historical perspective opening the way to the future and contribute to mutual understanding of peoples with different perceptions of history. Through its “museum-based research integration” style of active research sharing, which organically links resources, research, and display facilities, Rekihaku promotes new research, making full use of its strengths as an inter-university research facility to support interdisciplinary and collaborative scholarship both in Japan and overseas as well as encourage the merging of the perspectives of the social sciences and humanities with the natural sciences and other related fields.

Research

Research projects at Rekihaku are organized on common themes with the participation of scholars of different fields from universities and research institutes in Japan and overseas. The projects consist of collaborative research of three types: “Basic research” is interdisciplinary research conducted under broad themes. “Scientific research” is advanced digitization of documents and artifacts in the institute collection and building of new methodological foundations for historical research. While the above two types are the core of collaborative research, the third type, “Development-style research” is devoted to the development of new research themes and training of researchers. During FY 2014, six basic researches, twelve scientific researches, and one development-style research were conducted.

Three research projects on materials in the Museum collection are under way aimed at making effective use of the documents and artifacts in the Rekihaku collection. Sixteen exhibition projects are also under way, with the purpose of building the permanent exhibition, special exhibitions, and feature exhibitions.

The results of Rekihaku-sponsored research projects are published in the *Bulletin of the National Museum of Japanese History* and the *National Museum of Japanese History Annual Report* as well as in exhibition catalogues, bibliographies, and other publications.



Excavation of the Uiseong Yunamri site (East Asian Cultural Properties Institute)

Resource Sharing

Collection Activities

Rekihaku is engaged in the continuous collection of authentic documents, reproductions, audio and visual materials, and relat-

ed items. As of May 2014 it had 238,385 items in its collection (including five national treasures, eighty-five important cultural assets, and twenty-seven art treasures). It has a library of some 325,401 titles.

Database Access

Rekihaku provides various databases (forty-six as of May 2014), including one designed for both specialist and public access to the documents and artifacts in its collection, containing bibliographic information, another of the outcomes of collaborative research, and another that contains the full texts of historical records.

Exhibitions

Permanent Exhibition

Rekihaku's permanent exhibition presents selected themes from Japanese history and culture with emphasis on the history of people's life. The displays are divided into six galleries. Galleries 1 through 3 trace history from primeval and ancient times through the medieval and early modern periods. Gallery 4 introduces folk life, Gallery 5 the modern period (late 19th century to 1920s), and Gallery 6 the contemporary period (1930s to 1970s). Feature exhibitions are held within Galleries 3 and 4.

Special Exhibitions



Illustrated screens of Edo and parades in early modern Japanese paintings

Rekihaku holds special exhibitions several times a year to publicize the results of collaborative research and show the artifacts in its collection.

■ Botanical Garden of Everyday Life

The Botanical Garden of Everyday Life presents a systematic arrangement of plants that traditionally played an important part of everyday life in Japan, arranged under the themes of “eating,” “weaving/papermaking,” “dyeing,” “curing,” “tool making,” and “coating/burning,” exhibited in such a way as to show the history of daily life. Special exhibitions featuring plants of the season show the garden plants that have traditionally been grown in Japanese household gardens. Special observation lectures are held once a month.

Social Outreach

Rekihaku assures that its activities benefit society by making the results of collaborative research available to the public not only through exhibitions but other programs as well.

Rekihaku Forums and Lectures

Forums and lectures are held as a means of presenting to the public the results of research undertaken at Rekihaku.



Rekihaku Lectures

Educational Projects for Children

Rekihaku conducts educational projects aimed at young children with its “Experience Rekihaku” space where they can learn from direct experience using “discovery boxes” (*Rekihako*), and through the “Rekihaku Worksheets for Children,” which can be answered while touring the galleries.

Training Workshops for Specialists

Rekihaku cosponsors, with the Agency for Cultural Affairs, workshops that provide additional training for specialists from other history-and-folklore-related institutions from around the country.

Building Networks among History and Folklore Museums

Rekihaku serves as the core museum and secretariat of the National Council of Historical and Folklore Museums (686 mem-

bers) founded in response to the Great East Japan Earthquake and Tsunami disaster of 2011. The council’s activities are dedicated to responding to emergency situations and facilitating links among historical and folklore museums.

Introducing Rekihaku

Active efforts are made to introduce and explain Rekihaku through publication of the history-oriented magazine *Rekihaku* and maintenance of the Rekihaku website (<http://www.rekihaku.ac.jp>), as well as through distribution of the information relating to special exhibitions and events and through displays at inter-university-sponsored symposiums.

Academic Exchange

Rekihaku is engaged in scholarly exchange with universities, research institutes, and museums in Japan and overseas. As of 2014, it had established nineteen exchange agreements with other institutions in Japan and overseas.

Graduate School Education

The Department of Japanese History of the School of Cultural and Social Studies of the Graduate University of Advanced Studies (Sōkendai) was established in 1999. Its graduate program takes the form of individual classes, basic practice, and intensive courses for the training of researchers and writing of their doctoral dissertations. In 1997 Rekihaku adopted a special inter-university researcher system, under which it accepts and trains graduate students of various universities in history, archaeology, folklore, and related fields.

Objectives for the Third Medium-Term Plan

Rekihaku is proud of its “museum-based research integration” approach through which to fully utilize its functions as an inter-university research facility equipped with a museum. It will continue to enhance and develop this stance during the Third Medium-Term Plan. This plan includes five tasks: (1) the continuous rebuilding of the permanent exhibitions; (2) attention to diverse topics including the environment, disasters, war, cities, livelihood, religion, minorities, life and death, disparities and the economy; (3) development of the historical content that is the foundation of the permanent exhibition through liaison with history-related museums overseas; (4) opening up of new territories of research through fusion of the humanities and scientific approaches using our newly opened Integrated Research Wing; (5) emphasis on linkages with lifelong learning and school education. The research tasks of particular importance in this phase will be “study of back-up and meta-data for Japanese history” and “new developments in the study of historical periodization through research integration for the rebuilding of images of the prehistoric and ancient periods.”



NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERATURE

国文学研究資料館

The National Institute of Japanese Literature (NIJL) maintains a massive collection of Japanese literary texts and related documents gathered over forty years since its founding as a central hub of research on Japanese literature. It makes the collection available to research institutes and scholars in Japan and overseas and works to generate broadly interdisciplinary research utilizing the rich resources of knowledge to be found in Japanese classical and other works. While engaging in ongoing programs for the survey of and research on Japanese literature and the collection and preservation of, and provision of public access to, that literature and documents related to it, NIJL also promotes advanced collaborative research with scholars and organizations in and outside Japan, aimed at clarifying the features of Japanese literature and culture.

Resource Sharing

NIJL works to further the advance of basic research on Japanese literature and related topics in long-term perspective based on surveys and research of documents and scholarly exchange among institutes in Japan and overseas, as well as promote new research trends. As part of its efforts to facilitate new research internationally, it also engages in collaborative research in three categories: core research, specific research, and international collaborative research.

Through the Collaborative Research Committee formed with the participation of members from outside the Institute, NIJL evaluates plans for collaborative research and the results of the research conducted, endeavoring to promote the use of such results in further research.

Resource Sharing

Survey and Acquisition

In close collaboration with some 200 researchers throughout Japan who are attached to universities and other institutions, NIJL staff visit owners (organizations and individuals) of original texts (handwritten copies, imprints, etc.) to conduct bibliographic and other research.

The Institute reproduces such texts on micro-negative film or in digital format when permission is obtained to do so. Since 2005, it has been engaged in collaborative investigations based on agreements concluded with other universities and institutions.

Access to Documents

The NIJL Library provides reading and copying services. Users in distant locations may make use of its reproduction and other services through the inter-library loan system. Inquiries about the Institute's collection are accepted by telephone or by regular mail. Some of the documents in the collection can be viewed at the Institute's website.



Library

Database Access

NIJL provides access to scholarly information through databases that have become indispensable to scholars, including the "Database of Articles on Japanese Literature" and the "Union Catalogue of Classical Japanese Books."

Social Outreach

To provide public access to the results of research at the Institute, NIJL holds exhibitions, lectures, symposiums, and seminars.

Exhibitions

NIJL presents exhibits to make available the results of institute programs and collaborative research. Since 2013, it has maintained a permanent exhibition that users may view at any time, showing how works of classical literature have been read and passed down over the centuries. It also presents special and planned exhibitions at appropriate times.

2015 Permanent Exhibition "A History of Classical Japanese Literature Seen Through Books"

April 1–September 30, 2015 (tentative)

The exhibit traces the history of Japanese literature from the Nara period (eighth century) to the beginning of the Meiji era (late nineteenth century) through primary materials such as hand-copied manuscripts and printed copies. Providing more than

simply a visual chronology of the literature, the displays illustrate the background shaping the creation of works and the relationships of influence between genres and works. The exhibit shows not only original books at the time they were created but later copies and printed editions, demonstrating how the works have been transmitted through the ages.



Poster for the permanent exhibition: "A History of Classical Japanese Literature Seen Through Books"

International Conference on Japanese Literature

The conference is held every year in the autumn to promote scholarly exchange among specialists on Japanese literature in Japan and overseas and to foster the development of research on Japanese literature. At the 39th conference, to be held in November 2015, papers will be read and a symposium held on the theme "Japanese Literature to Cross the Border (tentative)."

Kokubunken Forums

In order to promote research exchange, NIJL professorial staff members present their research results at forums held about ten times throughout the year.

Lectures on Japanese Classical Writing

Held with the cooperation of the National Diet Library, these lectures serve as training for librarians in Japan and from overseas on basic knowledge and handling of works of Japanese classical literature.

Archives College



Archives College (long-term course)

NIJL hosts long- and short-term courses to train and support the work of archivists who supervise the preservation and use of historic documents. Lecturers are mainly scholars from NIJL. The long-term course is held annually for eight weeks between July and September at the Institute. A short-term course will be held in November 2015 in the Mie Prefectural Museum.

"Japanese Classics Day" Lecture

November 1 has been designated "Classical Literature Day" by the government. A special lecture will be held in the first part of November.

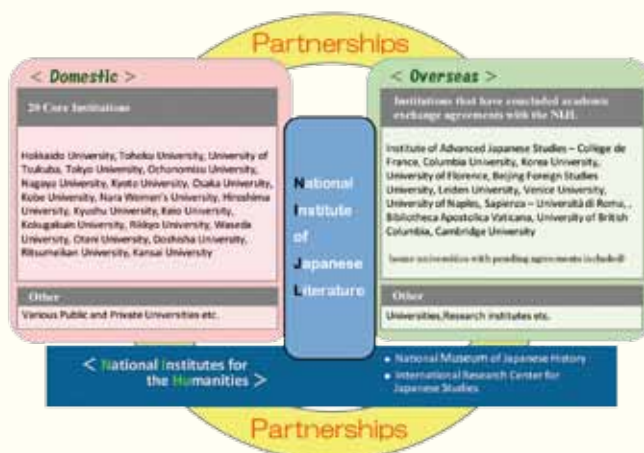
Graduate School Education

NIJL is the parent institute of the Department of Japanese Literature of the School of Cultural and Social Studies of the Graduate University for Advanced Studies (Sōkendai). Based on the personnel and research environments of eighteen inter-university research institutes, Sōkendai offers graduate-level courses and also engages in research. The Department of Japanese Literature offers multifaceted guidance for graduate students reconsidering traditional Japanese literature research in a comprehensive manner from the viewpoint of cultural science.

Under the special inter-university researchers system, NIJL accepts graduate students in response to demand from universities and provides research guidance to them.

Objectives for the Third Medium-Term Plan

The Project to Build an International Collaborative Research Network on Pre-modern Japanese Texts, which will be centered at the National Institute of Japanese Literature, will partner with universities and other institutions in Japan and other countries to digitally scan approximately 300,000 pre-modern Japanese texts in order to create the single largest Japanese classical text database for scholarly research in Japan and build an international collaborative research network to use these images. This project spans all scholarly fields in the humanities and social sciences and includes various fields in the natural sciences.



International Collaborative Research Network Diagram



NATIONAL INSTITUTE FOR JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS

国立国語研究所

The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL), as an international hub for research on Japanese language, linguistics, and Japanese-language education, aims to illuminate all aspects of the Japanese language as one of the many languages of the world by conducting large-scale collaborative research projects with universities and research organizations inside and outside of Japan.

One of its other important missions is to make widely accessible to the public the outcome of joint research as well as information on research publications, thereby promoting their application in such fields as natural-language processing.

Research

NINJAL works in collaboration with universities and research institutes in Japan and overseas to undertake research projects on an overarching nationwide or international scale that could not be attempted by individual universities alone. These projects are based on the purpose of the Institute as a whole, which is to engage in the comprehensive study of Japanese from the perspective of the languages of the world. Research themes aimed at fulfilling this purpose are planned and a number of collaborative studies are carried out under each theme.

Department of Linguistic Theory and Structure

The Department pursues theoretical, empirical, and experimental studies on contemporary Japanese, focusing mainly on its grammar/syntax, phonetics/phonology, lexicon/morphology, semantics/pragmatics/discourse, and characters/writing.

Department of Language Change and Variation

With a view to clarifying the geographical and social, as well as historical, variations of Japanese, collaborative studies are under way focused on nationwide surveys of dialects, especially dialects in danger of becoming extinct, and on the dynamics of contemporary Japanese.



Interview with a dialect speaker

Department of Corpus Studies

Basic research is being done for the building and utilization of Japanese-language corpora (large-scale language resources, systematically compiled to accurately reflect language usage, that can be electronically searched).

Department of Crosslinguistic Studies

Aiming to clarify the nature and characteristics of the Japanese language through comparison with other languages of the world, researchers both in Japan and overseas participate in typological research.

Center for JSL Research and Information

Dealing with various issues involved in the teaching and learning of Japanese language as a second language, the Center conducts empirical research on language learners' communication in Japanese, gathers information from wide sources, and disseminates it to those interested in Japanese-language education.

Resource Sharing

Center for Research Resources

The Center builds and makes available online various databases such as the Bibliographic Database of Japanese Language Research. It also publishes in print and online the periodicals *NINJAL Project Review* and *NINJAL Research Papers*.

Center for Corpus Development

Cooperating closely with the Department of Corpus Studies, the Center is engaged in the development and utilization of corpora and other language resources.

Research Library

Japan's only library devoted exclusively to the Japanese language, the NINJAL Library collects and stores mainly research materials and linguistic resources concerning Japanese-language research and the Japanese language, as well as Japanese-language education, general linguistics, and other related subjects, and makes them available for joint use.

Social Outreach

Social Interaction through Special Research Projects

■ Research on Endangered Dialects in Japan

The UNESCO list of endangered languages of the world announced in 2009 included eight languages / dialects spoken in Japan. NINJAL is engaged in the intensive recording and analysis of these dialects, thereby contributing to research on endangered languages being conducted worldwide. NINJAL also seeks to preserve Japan's language heritage and activate interest in local communities.

■ Research on Japanese-language Education in Multicultural Communities

With the increase in the number of non-Japanese residing or studying in Japan, the needs of those studying the language are diversifying. Through empirical research on teaching and learning for communication skills in Japanese as a second (foreign) language, NINJAL provides resources for the improvement of the content and methods of Japanese language teaching and learning and for easing social problems such as friction with other cultures.

Connecting with Society through Public Events

In order to make public the results of outstanding research undertaken at the Institute for the betterment of society, NINJAL holds programs for general audiences as well as symposiums, seminars, and workshops for specialists.



The 8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ8)

Graduate School Education

Since 2005, NINJAL has conducted a graduate studies program

in collaboration with Hitotsubashi University. This inter-institutional graduate school aims to train researchers and Japanese-language educators equipped with specialized knowledge about Japanese-language teaching, Japanese language, and Japanese culture.

NINJAL also offers a tutorial program aimed at training next-generation researchers by providing young researchers, mainly graduate students, with the results of recent scholarship and the latest research methods.

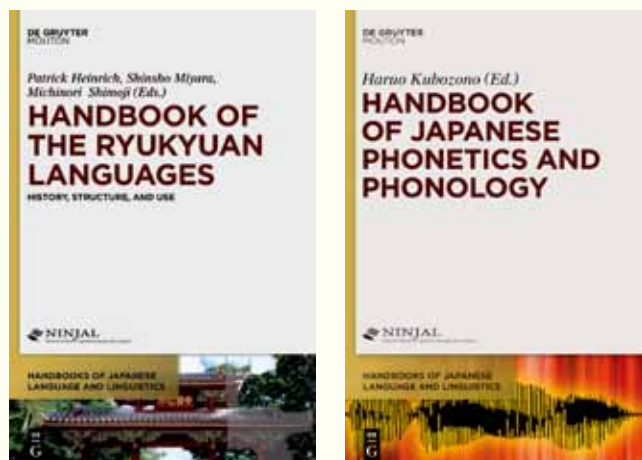
Objectives for the Third Medium-Term Plan

■ Development of and Public Access to Corpora of Japanese-language Resources

Viewing Japanese as part of the language resources of humankind, NINJAL has been working to make the massive amount of data in Japanese-language corpora electronically searchable. The Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ) is used widely not only by Japanese-language specialists, but by developers working on information processing technologies and by the mass media and other users. We will continue to be involved in the planning and development of other corpora, including one on a 10-billion-word scale, another for historical Japanese, and others for learners of spoken Japanese and endangered dialects.

■ Internationalization of Japanese Language Research

For enhancing the importance of NINJAL as an international hub of research on the Japanese language, we are engaged in various international liaison activities, such as research tie-ups with the University of Oxford, the Academia Sinica (Taiwan), and other institutions and the holding of symposiums. Also, under an agreement with leading international publisher of linguistics titles De Gruyter Mouton, NINJAL is publishing the series *Handbooks of Japanese Language and Linguistics*, presenting a comprehensive selection of contributions to the body of research on Japanese and Japanese linguistics.



"Handbooks of Japanese Language and Linguistics" Series

INTERNATIONAL RESEARCH CENTER FOR JAPANESE STUDIES

日文研 国際日本文化研究センター

The International Research Center for Japanese Studies (Nichibunken) was founded to pursue international, interdisciplinary, and comprehensive research on Japanese culture and to provide research cooperation and support for Japanese studies scholars around the world. In accordance with its mission to serve as a hub of international research on Japanese studies, it promotes the advance of international collaborative research. In addition, through its emphasis on acquisition of works in Japanese studies written in non-Japanese languages and collection of visual materials on Japanese life and customs, Nichibunken develops database systems suited to next-generation research, and it seeks to foster scholarship on Japanese culture internationally, thereby building hubs for research on Japanese culture around the world.

Research

Research at Nichibunken centers on both individual and team organized projects. Team research is based on a conceptual matrix composed of five spheres that form the overall framework for the comprehensive study of Japanese culture. Each sphere is subdivided into several categories, or “research foci,” that specify the orientation of research projects. (See accompanying diagram.)

Research cooperation includes acceptance of specialists from overseas to engage in research at Nichibunken, holding of international symposiums to promote research exchange, and making available information on research accumulated at Nichibunken.

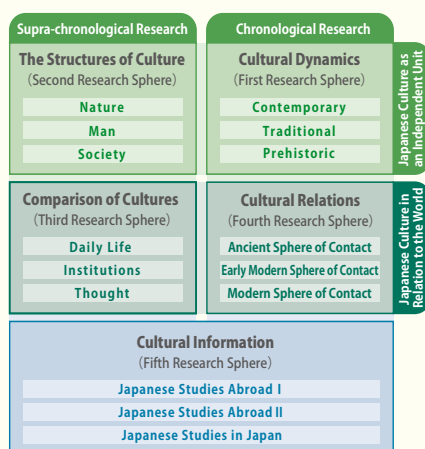


Diagram of Nichibunken research activities, showing research spheres and research foci

Team Research

The primary emphasis of research at Nichibunken is team research on Japanese culture. The advancement of research on Japanese culture not only calls on scholars to steadily accumulate the results of work in their respective fields but also requires forums where they can expand and enhance their knowledge by working together across disciplinary lines.

The emphasis on exchange with researchers from overseas whose intellectual traditions differ from Japan’s is aimed at the multifaceted internationalization of the study of Japanese culture. The objective, therefore, is not only exchange of the outcomes of research but achievement of results based on the creativity that is generated by collaboration in the research process.

In fiscal 2014, a total of sixteen team research (including two international team research) projects were conducted, of which five were related to the study of popular culture (*taishū bunka*).

International Research Symposiums

As interest in Japanese culture and society has heightened in countries around the world, the theoretical approaches and research methods of scholars have greatly diversified. Nichibunken holds international research symposiums—mainly on the themes of the team research projects going on at the Center—and provides forums for international debate about the advancement of Japanese studies.

Research Meetings Held in Japan

The Nichibunken Forum events, which are open to the public, are held monthly at venues in the city of Kyoto in order to provide occasions for visiting scholars from abroad to present their research and engage in exchange. The Nichibunken Thursday Seminars and Nichibunken Evening Seminars, held monthly at Nichibunken, are opportunities for the faculty of Nichibunken and scholars from other countries to present research findings and exchange ideas.

Lectures and symposiums are presented by faculty members in their areas of specialization or on interdisciplinary themes organized in cooperation with overseas scholars.

International Symposiums and Other Meetings Overseas

Once a year, Nichibunken sponsors an international symposium overseas to extend its research activities and research cooperation beyond the borders of Japan. In FY 2014 the theme was “New Vistas: Japanese Studies for the Next Generation,” and the symposium was held at Nichibunken, rather than in an overseas location.

Also, in order to foster networks among overseas researchers in Japanese studies, Nichibunken sends members of its faculty abroad several times a year to hold small- and medium-scale symposiums at which scholarly papers are presented and views are exchanged with local scholars. These events provide the occasion for establishing contact with promising young local scholars and learning about how Japanese studies is being pursued in different countries.

Resource Sharing

Library

The Nichibunken Library collects a wide range of materials needed for research on Japan and makes these materials available to researchers. It also provides access to Japanese studies-related information of various kinds. The 510,000 titles in the library can be searched via the online public access catalog (OPAC) and researchers outside Nichibunken may use the inter-library loan system to apply for document copying and loans of books and other materials. The collection prioritizes books about Japan written in other languages and translations of Japanese works originating in Japan and overseas. In addition to books and periodicals, the collection includes colored photographs from the late Edo and Meiji periods, old maps, and video, DVD, and CD audio and visual materials.



"The Seven Gods of Good Fortune" (Shichifukujin); Japanese Traditional Event Calendar, 1883

Public Database Access

Nichibunken develops databases of the materials in its collection, the outcomes of research by its faculty, and Japan-related materials held by other organizations. It now provides public online access to 53 databases. Nichibunken lectures may be viewed online in real time via Internet broadcasting. Public access to an archive of 225 lectures recorded since 1997 is now available (as of December 2014).

Social Outreach

As a research institute that strives to be open to society, Nichibunken makes the results of its research and research collaboration activities widely available to the public through the following means:

Publications

Nichibunken publishes and sends to research institutes around the world the results of research through such publications as *Nihon kenkyū* (in Japanese, partially in English), the English-language journal *Japan Review*, the Nichibunken Sōsho series (in Japanese), and titles in the Nichibunken Monograph series (in English), as well as reports of symposiums and other projects held in and outside Japan.

Public Lectures

Three or four times a year, Nichibunken faculty present reports of their research in the Nichibunken auditorium. As part of the Center's efforts to publicize its activities and contribute to society, public lectures aimed at general audiences are sometimes offered during international research symposiums held at Nichibunken as well. In addition, the Nichibunken-IHJ Forum series of lectures was begun in 2014 in collaboration with the International House of Japan in Tokyo, presenting lectures from a variety of perspectives intended to deepen understanding of Japan and Japanese.



A lecture in the Nichibunken-IHJ Forum series

Graduate School Education

The Department of Japanese Studies of the School of Cultural and Social Studies of the Graduate University for Advanced Studies (Sōkendai) is located at Nichibunken. The Department promotes interdisciplinary and comprehensive Japanese studies education and research from an international perspective. Students from abroad as well as from Japan enroll in the Department's doctoral program. Under the special inter-university researchers system, the Department also accepts and trains graduate students recommended by other universities.

Objectives for the Third Medium-Term Plan

In order to build international networks and strengthen its functions as an international hub of research, starting in FY 2013 Nichibunken has been implementing new international team research projects, half of whose members are scholars residing overseas; it also emphasizes research on contemporary culture and stresses the opening up of new areas of research and the training of international scholars of Japanese culture.

In its acquisitions, Nichibunken places priority on works in Japanese studies written in other languages that may not be collected at other institutes and on visual materials on lifeways and customs that may easily be scattered and lost. The continual updating of its information systems and database systems assures that their functions and volume will better serve current and future generations of Japanese studies scholars around the world.

Responding to the major changes taking place in the environment of which Nichibunken is a part, we will continue to strengthen and enhance our efforts in building a vital global hub for Japanese studies equipped for the next generation.



RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANITY AND NATURE

総合地球環境学研究所

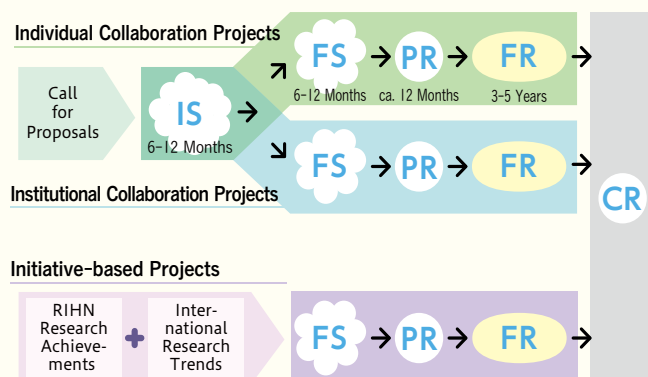
The Research Institute for Humanity and Nature (RIHN) was founded in April 2001 to promote “integrated cooperative research toward the solution of global environmental problems” and to create the field of global environmental studies.

As an institute, RIHN solicits, hosts and funds fixed-term research projects on key areas of interaction between humanity and nature. As distinct from other environmental research institutes in Japan, however, the purpose of RIHN research is not only to link knowledge of complex natural processes with that of the lifestyle and culture of different regional communities, but to build holistic knowledge frameworks that allow for qualitative leaps in the human ability to solve environmental problems.

As RIHN grows, it seeks greater integration within and between its research projects and has developed a special division in order to accomplish this task. The institute has also become an important partner within Future Earth, a ten-year international research initiative addressing the social and ecological dimensions of global environmental change.

Research

As of 2015, there are three kinds of research projects at RIHN: Individual Collaboration Projects, Institutional Collaboration Projects, and Initiative-based Projects. In most cases, researchers participate in research projects on the basis of fixed-term appointments, and the projects progress through several stages. At each stage the validity of the research plan, feasibility of its implementation, and significance of results are evaluated in a system designed to assure the quality and autonomy of the research. At the Incubation Study (IS) stage, potential project themes are openly solicited from both inside and outside the Institute, allowing new ideas and aims (research seeds) to be discovered. Studies that are judged to have reached the planning phase then move to the Feasibility Study (FS) stage. The achievements of these studies are subject to assessment by the Project Evaluation Committee, an external review committee composed of Japanese and international specialists. If judged appropriate by the Committee and approved by the Board of Advisors, projects pass through a transitional period of Pre-Research (PR) before advancing to the Full Research (FR) stage, which lasts from three to five years.



Resource Sharing

Exchange of Intellectual Resources

By the end of the 2014 fiscal year, twenty-six research projects had been completed, and their outcomes disseminated for utilization in various fora and contexts. These projects have engaged nearly 1,000 Japanese and international experts in disciplines ranging across the natural sciences, humanities, and social sciences. RIHN projects have involved many forms of formal collaboration with national, public, and private universities, research institutes, NGOs, ministries and other government offices, journalists, and others involved in studying solutions to contemporary social-environmental problems.

Resource Exchange in the Field

RIHN research projects take place in Japan and around the world, with a special emphasis on Asia. They involve close collaboration with local researchers and experts. In conducting collaborative projects overseas, a memorandum or research cooperation agreement is signed with appropriate local organizations, followed often by exchange of persons, joint surveys and analysis, sharing of research results, and the like. Making the most of its networks and experience with joint research, RIHN organizes exchange of information on local environments with relevant research organizations in Japan.

Facilities and Equipment for Information Exchange

Performing scientific diagnoses of environmental conditions and sharing information with stakeholders and citizens is vital to improving understanding of potential solutions to global environmental issues. RIHN maintains a world-class laboratory for analysis of stable isotopes and DNA, as well as the facilities necessary for basic environmental fieldwork and data analysis.



Dabbling at field work, Burkina Faso

Social Outreach

RIHN International Symposium

Each year RIHN holds an international symposium describing the key findings of concluded RIHN research projects. On June 25–27, 2014, a range of project members and invited international specialists gathered at RIHN for the 9th International Symposium entitled “Living in the Megacity: The Emergence of Sustainable Urban Environments”.

RIHN Forum

An annual RIHN Forum, usually held at the Kyoto International Conference Center, is open to the general public. Since 2004 the proceedings have been published in Japanese as books intended for a general audience. On July 12, 2014, the 13th RIHN Forum took place at the Kyoto International Conference Center on the topic “How to Co-design the Global Environment and Our Future.”

RIHN Public Seminars

In order to introduce its research achievements to the public and to enhance public understanding of on-going developments in environmental issues in an easy-to-understand manner, RIHN holds public seminars on a regular basis at RIHN and other venues in the city of Kyoto. On July 18, 2014, the 58th RIHN Public Seminar took place at RIHN on the topic “Did the Heike Collapse Out of Arrogance? What Tree Rings Tell Us.”

Publications

■ Humanity & Nature Newsletter

Published every other month, this newsletter provides the researcher community with the latest information on the views and activities at RIHN. The newsletter serves as one medium of communication with researchers in Japan and overseas involved with RIHN.

■ RIHN Book Series: Global Environmental Studies

RIHN partners with Springer Publishers to publish the Global Environmental Studies book series. Titles in the series reflect the full range of RIHN scholarship and international research collaboration. In 2014 two new titles were added to the Series,

Social-Ecological Systems in Transition and Groundwater as a Key for Adaptation to Changing Climate and Society. Several additional volumes are now in preparation.

Graduate School Education

In FY 2010, building on more than eight years of research collaboration with Nagoya University, RIHN signed an agreement to participate in the training of graduate students at the university’s Graduate School of Environmental Studies. RIHN also brings in graduate school students from other universities and provides research guidance to them in global environment-related fields such as anthropology, botany, ecology, geography, and agriculture. The Institute actively employs young post-doctoral researchers as project researchers and provides them with opportunities to take part in RIHN research projects and also in planning and management of new projects as well as the normal operation of the Institute as a whole.



Field interview with local fisherman, Senegal

Objectives for the Third Medium-Term Plan

At RIHN, we plan to continue to pursue “design science” and the field of “global environmental studies.” To that end, we plan to develop research mainly on Asia, building on RIHN’s accumulated research thus far. Asia is the scene of diverse natural environments, cultures, and values; with the rapid spread of economic development and globalization in recent years, it has been undergoing accelerated urbanization, and drastic land-use and social change not seen in other parts of the world. Declining birthrates and rapid aging of society economic and social disparities, and other problems are surfacing, as well. In addition to the natural disasters that have long been part of Asia’s history, the risk of disasters caused by global warming is increasing. Based on awareness of such issues of our contemporary society, RIHN will continue its quest for a healthy society by conducting integrated research on the Earth’s environment and by fostering of all kinds of dialogue among researchers and members of society in general.



NATIONAL MUSEUM OF ETHNOLOGY

国立民族学博物館

A research institute for cultural anthropology and ethnology with its own museum, the National Museum of Ethnology (Minpaku) is an international hub of research and collaboration. It engages in international projects for research and exhibitions related to peoples, culture and society throughout the world, and encourages the international use of the cultural resources held by the museum. By supporting international collaborative research and exhibition, Minpaku plans to create a virtual “Info-Forum Museum for Cultural Resources of the World” and share cultural resources on a global scale.

Research

Research Organization

Minpaku’s research is organized with three departments and two centers—the Departments of Social Research, Cultural Research, and Advanced Studies in Anthropology, and the Center for Research Development, the Research Center for Cultural Resources. Also the Center for International Academic Exchange is facilitating international exchange between academic organizations.

Core Research Projects

Minpaku pursues cross-disciplinary and pioneering themes to advance scholarship and meet the needs of society. Through institutional cooperation with research organizations in Japan and overseas, Minpaku seeks to internationalize collaborative research. In FY 2014, four research projects were undertaken under the core research topics of “Anthropological Studies of Inclusion and Autonomy” and “Anthropological Studies of Materiality.”

Inter-University Research Projects

Each year, scholars at Minpaku team up with outside specialists to pursue interdisciplinary research on themes related to anthropology and ethnology. About 40 such projects are under way in the course of each fiscal year.

Individual Research Projects

Individual researchers at Minpaku are free to plan, propose, and develop their own projects. Their diverse approaches form the foundation for research and research development at Minpaku.

Dissemination of Research Results

■ Academic Publication

Minpaku publishes the *Bulletin of the National Museum of Ethnology* (in Japanese, with English abstracts), *Senri Ethnological Studies* (SES), *Senri Ethnological Reports* (SER, in Japanese and other languages), *Annual Report of the National Museum of Ethnology* (in Japanese, with English abstracts), and *Minpaku Tsūshin* (in Japanese, quarterly). In FY 2014, three books (as of December 2014) were published by commercial publishers with support from the Minpaku publication support program.

■ Research Dissemination Programs

Minpaku organizes and attends international symposia and other meetings in Japan and overseas in order to disseminate research conducted by its scholars, for the benefit of society. In FY 2014, it organized 25 symposia and meetings (as of December 2014).



International Council
for Traditional Music
“Music and Minorities”

Resource Sharing

Minpaku has a collection of some 340,000 objects related to subsistence, domestic life, rituals, production techniques, and other aspects of human existence. These are available for use in research and university education and for loan to other museums.

Library

Specializing in materials relating to anthropology and ethnology, the Library houses a collection of some 260,000 titles in Japanese and 390,000 titles in other languages. Under the interlibrary loan system, the Library supports educational and research activities by providing document-copying and lending services.

Databases

In addition to online catalogues of the artifacts, audio and visual materials, books, and periodicals in its collection, Minpaku provides online access to databases such as the “Korean Daily Commodities Collection” and “Performing Arts Film.”

Exhibitions

■ Main Exhibitions

The permanent exhibitions are located in nine regional galleries covering every part of the world and two cross-cultural thematic galleries for music and language. Renovation of the exhibitions is under way. During FY 2014 the South Asia and Southeast Asia

Regional Exhibits were renewed and reopened.

Among thematic exhibitions that introduced contemporary topics or the results of the latest research were the “Minpaku Toy Expo: The Antique Toy Collection (Tangible Folk Cultural Property of Osaka Prefecture)” and “Unknown Land, Greenland: Its Nature and Culture.”

■ Special Exhibitions

The special exhibitions are large-scale events introducing recent research on a specific theme in a multifaceted and systematic manner. In FY 2013–2014, the “Power of Images: The National Museum of Ethnology Collection” exhibit was mounted in commemoration of the 40th anniversary of the founding of Minpaku and the 50th anniversary of the Japan Society of Cultural Anthropology, and opened at the National Art Center, Tokyo from February 19 to June 9, 2014 and at Minpaku from September 11 to December 9, 2014.



“The Power of Images: The National Museum of Ethnology Collection” Exhibition

Social Outreach

Public Academic Lectures

Minpaku holds lectures in order to promote understanding of other cultures. During FY 2014, the lectures included “Intangible Cultural Heritage: Expectations and Realities” and “Healing Tours to Asian Countries.”

International Collaboration

Minpaku has signed academic exchange agreements with 19 institutions in 12 countries and regions, and its researchers are continually engaged in collaborative projects with outside specialists. It also conducts a training and dialogue program on “Museums and Community Development”. This is commissioned by the Japan International Cooperation Agency (JICA), to help people acquire further practical museum-management skills, thereby contributing to the advancement of culture in their countries.

Promotion and Publishing

Minpaku publishes the periodicals *Gekkan Minpaku* (Minpaku Monthly, in Japanese) and the *Minpaku Anthropology Newsletter* (semiannual, in English); the *Guide to the National Museum of Ethnology* (in Japanese), special-exhibition guidebooks and catalogues, and other materials to promote the research and other activities of the Museum.

Seminars and Weekend Salon

Minpaku Seminars, which introduce the latest results of Minpaku research, take place on the third Saturday of every month. The “Minpaku Weekend Salon: Chat with a Researcher” is held

almost every Sunday.

Films, Special Lectures and Performances

In FY 2014, ten film showings were held under this program, which aims to deepen understanding of topics in cultural anthropology and ethnology. Four research presentations introducing the music and performing arts of different peoples of the world were given in FY 2014.



“Over the Arirang Pass: Zainichi Korean Music Today”

Learning Kit “Min-pack”

“Min-packs” are learning packets that are lent out for use in schools. They contain items such as clothing, musical instruments, tools, school supplies, and other implements from different countries or regions around the world. There are currently 14 types of packet and a total of 23 units available for lending.

Graduate School Education

The Department of Regional Studies and the Department of Comparative Studies of the School of Cultural and Social Studies, Graduate University for Advanced Studies (Sōkendai), are located at Minpaku. To date, 59 persons have received their doctoral degrees from these departments by coursework and 30 have earned doctoral degrees by submission of a thesis only. The departments also accept and train graduate students from other universities through the Inter-University Visiting Researcher Program.

Objectives for the Third Medium-Term Plan

In the four decades since its founding, Minpaku has supported research on peoples and cultures all around the world, and it has accumulated a highly diverse store of artifacts, other materials and information related to those peoples and cultures. We hope to share these tangible and intangible materials and information about them as “cultural resources of the world” with others of our time and future generations. In order to realize this goal, we are pursuing international collaborative research on diverse cultural resources, working with research organizations, universities, museums, and local societies. From the results of such research, we plan to build a multi-lingual, interactive database. Also, by combining information of various kinds, we hope to create an “Info-Forum Museum for Cultural Resources of the World” to transmit, exchange, generate, and share information. In pursuing this goal, we plan to emphasize exchange not only among researchers but also with local societies that have created cultural resources and other sectors including the general public.

Promotion of Research in the Human Sciences

The most pressing tasks in the twenty-first century are the coexistence of all peoples in the world and the survival of humankind on this planet. The human sciences continue to hold the keys for addressing these difficult challenges. NIHU promotes the development of new fields of study in the human sciences and research activities aimed at development of advanced and international research. It coordinates inter-institutional resource sharing in Japan and overseas.

I. Inter-Institutional Research

Bringing together the research results and resources accumulated by its six constituent institutes, NIHU plans and implements inter-institutional research that promotes the opening up of new perspectives and the further advancement of research. Under the Second Medium-Term Plan (FY 2010–2015), this program focuses on two themes: Comprehensive Research on Human Cultural Resources and A Historical Synthesis of Nature and Culture in Asia. Since FY 2012, following the Great East Japan Earthquake the previous year, NIHU has supported the Research in the Human Sciences on Catastrophic Disasters project; studies begun under this project are now in their final year.

Comprehensive Research on Human Cultural Resources (<http://www.minpaku.ac.jp/ningenbunkashigen/index.html>)

Research under this theme assesses the history of humankind from the viewpoint of the development and use of diverse resources. Studies examine anew the practices, institutions, and relevant concepts/values of various eras and different parts of the world in terms of their relationship to the use of resources. Research teams have been organized to identify new avenues of research in documentary resources, daily life artifacts, and visual resources.

A Historical Synthesis of Nature and Culture in Asia (http://www.chikyu.ac.jp/People_Nature/)

Nature has been the ultimate source of human wellbeing throughout Asia. The great cultural diversity of Asia, and Japan, was born of many specific and longstanding patterns of human interaction with the natural environment. This is an important, but lesser-studied, dimension of human culture. How have human perceptions of nature evolved through time, as individuals and communities have sought to protect themselves from hardship, expand their control over nature, and improve their wellbeing?



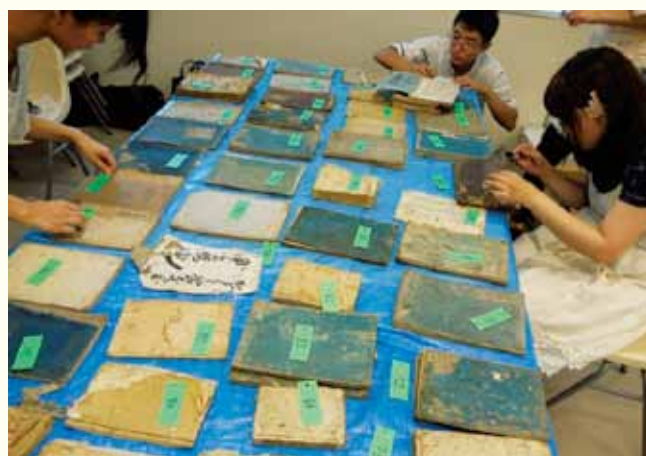
Joint field survey at Sannai Maruyama archeological site, Aomori on July 28, 2014

These questions are investigated in three areas:

- I. Ideas and perceptions of nature embedded in language
- II. Incorporation of nature into culture
- III. Creation and governance of commons and common resources

Research in the Human Sciences on Catastrophic Disasters (<http://www.ninjal.ac.jp/shinsai/index-en.html>)

Since the time of the Great East Japan Earthquake in March 2011, a number of large-scale disasters have occurred in various parts of the country. As researchers studying human culture, how should we deal with disaster? This requires careful consideration and the respect for diverse views that is characteristic of the “human sciences,” covering studies of history, literature, folklore, linguistics, museums, and environment. In order to accomplish this mission, we started this research project in April of 2012. The activities of the past three years have focused on (A) Research on reconstruction and revival of local culture and environment; (B) Research on museum activities and collaborations; (C) Research on the preservation and use of materials. These activities are introduced in *Saigai ni manabu* (Learning from disaster; Bensei Shuppan).



Documents rescued from the tsunami disaster in the town of Futaba, near the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant

II. Inter-Institutional Exhibitions

NIHU holds exhibitions to make the results of research conducted by its institutes available to the public. Making the most of its character as a human sciences complex, NIHU plans coordinated exhibits held in collaboration with one or more of its constituent institutes. In 2014 the following exhibition was held.

*"Minpaku Toy Expo: The Antique Toy Collection
(Tangible Folk Cultural Property of Osaka Prefecture),"*
May 15–August 5, 2014, National Museum of Ethnology

This exhibition featured items from the Antique Toy Collection, an Osaka Prefecture Designated Cultural Treasure donated to the National Museum of Ethnology by the prefecture in 2013. Consisting of pieces gathered since the 1970s, the collection affords a complete picture of the history of toys in Japan from the Edo period up to the present. It is also closely related to the culture of manga, which is the subject of much attention from overseas as symbolic of the subcultures of Japan.



Exhibition held in Umi no Ichi, in the city of Kesenuma, Miyagi prefecture

III. Resource Sharing

As part of its Second Medium-Term inter-institutional collaborative research programs in the human sciences, NIHU is engaged in developing and managing research resource-sharing systems to promote sharing in academia of information resources accumulated by the six NIHU institutes and area studies centers. The program is implemented by the Committee of Resource-Sharing Projects.

The research resource-sharing system is currently made up of two systems: the "nihuINT" (NIHU Integrated Retrieval System), which cross-searches more than 100 databases of the six NIHU institutes and area studies centers 149 databases as of February 2015 and NDL (National Diet Library) Search (13 databases as of February 2015), and the time-space analysis system (GT-Map/GT-Time) for analyzing era/period information and geographic location and place-name information. Since 2010, NIHU has provided the GT-Map/GT-Time system to members of the academic community as free software.

In FY 2014, in order to achieve flexible links for research resources among the six institutes of NIHU and universities and other institutions outside of NIHU, a technical verification test using semantic Web technology was conducted, and study was begun with the aim of strengthening research resource sharing functions in preparation for the projects of the Third Medium-Term Plan. Also, in order to provide international access to the results of Japan studies and research in the human sciences in Japan, we have made a collection of international links publicly available.

IV. International Collaborative Research on Japan-related Documents and Artifacts Overseas

In 2010, NIHU embarked on an international collaborative research project to survey and study Japan-related documents and artifacts located in other countries. The aim of the project is to clarify the significance of Japanese culture in world history and promote international research on the subject. NIHU established the Committee for Survey and Research of Japan-related Documents and Artifacts Overseas, and in collaboration with the Historiographical Institute and the Institute for Advanced Studies on Asia at the University of Tokyo, the Institute for Research in Humanities at Kyoto University, and the Oita Prefecture Ancient Sages Historical Archives, it is engaged in comprehensive survey and research of diverse materials held overseas. A network of international research is being created through links to institutions overseas. Under the Second Medium-Term Plan, the following three projects are underway.

*Study of the Siebold Family Collection and Other
Materials Collected in Japan and Taken Overseas
in the Nineteenth Century*

(http://www.rekihaku.ac.jp/education_research/research/list/joint/2010/siebold/index-e.html)

By creating detailed catalogs, complete with digital images, not only of the materials collected by Philipp Franz von Siebold and his son, but several other nineteenth-century Japan-related collections held overseas, NIHU hopes to build a survey and research model for international resource sharing of such materials. The survey was conducted at the State Museum of Ethnology, Munich, the Ruhr-Universität Bochum, the Berlin State Library, the residence of the Brandenstein family, and other locations. Workshops on research in deciphering classical texts and studying Japanese artifacts, held annually by the Ruhr-Universität Bochum and other venues, will be continued. We hope these efforts will support the training of young researchers pursuing Japanese studies in Europe and North America.



Study of Japanese artifacts at the State Museum of Ethnology, Munich

Overseas Sources on modern Japanese Migrants and their Milieu: A Survey and Study

(<http://www.nichibun.ac.jp/~zaigai/>)

The China team published volumes 1 and 2 of the *Nikka Gakkai kanren Takahashi Kunpei monjo shiryō* (Takahashi Kunpei Documents Related to the Japan-China Institute). The American continents teams A and B surveyed documents in locations in North and South America and Hawai'i and published volumes 1 and 2 of *Nikkei Burajiru imin bungaku* (Immigrant Literature by Japanese Residents of Brazil). The oral documents team conducted oral history surveys mainly in Hawai'i and, working with American continent team A, held a survey and workshop. The Korea team published *Teikoku Nihon to shokuminchi daigaku* (Imperial Japan and Colonial Territory Universities). The Taiwan team co-published with the Academia Sinica Taiwan History Research Institute the work *Tsutsumibayashi Kazue-kankei bunsho senshū* (Selected Tsutsumibayashi Kazue-Related Documents). The cultural assets preservation team published *Sekino Tadashi tairiku chōsa to genzai* (Sekino Tadashi's Continental Survey and Today) and *Tōhō Bunka Gakuin kyūzō kenchiku shashin mokuroku* (Catalog of Old Architectural Photographs Formerly Owned by the Institute for Oriental Culture). NIHU makes available the results of its accumulated efforts (including its databases) not only to local Japanese users but to researchers from around the world.



Travel brochure for "Xinxing Tour of Manchukuo"

Survey and Research on the Preservation and Publication of the Mario Marega Documents in the Collection of the Vatican Library

Pursuant to an agreement between NIHU and the Vatican Library supporting research and publication, a project to survey more than 10,000 Kirishitan-related documents began in FY 2014. The project provides for (1) a general survey of the documents, (2) cooperation in the preservation of documents and in making them acces-



Survey being conducted at the Vatican Library

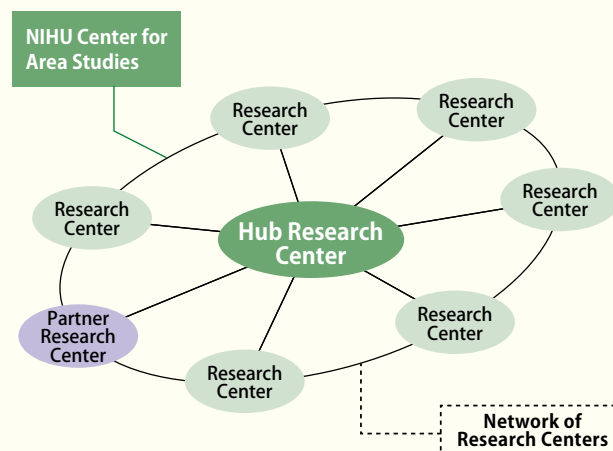
sible to the public, (3) digital scanning of the entire collection, (4) compilation of a catalog of the documents, and (5) online publication of the images. To be conducted with the cooperation of individual researchers in Japan and overseas, the Historiographical Institute of the University of Tokyo, the Oita Prefecture Ancient Sages Historical Archives, and the Vatican Library, the project will contribute to the information infrastructure of Kirishitan-related archives and research on intercultural exchange.

V. International Collaboration and Cooperation in Research

NIHU works to build connections for cooperation with institutions in other countries for research in the human sciences, invites scholars from other countries to study in Japan, helps arrange for Japanese scholars to study abroad, and supports the holding of international research symposiums. In FY 2014, it supported the National Institute of Japanese Literature international symposium "Memory of Individuals and Groups in Early Modern Towns" and the National Museum of Ethnology's Third International Symposium on Signed and Spoken Language Linguistics (SSL3): "Language Description, Documentation and Conservation and Cross-modal Typology." NIHU has tie-ups with the Arts and Humanities Research Council (AHRC) of the United Kingdom and other organizations overseas through which it promotes international research cooperation. Under its agreement with the AHRC, four graduate students and young researchers from the U.K. came to Japan for study.

VI. Area Studies

In order to cultivate comprehensive understanding of areas of academic and social importance to Japan, NIHU promotes area studies by jointly establishing research centers at related universities. Its Islamic Area Studies program was begun in 2006, Contemporary Chinese Area Studies program in 2007, and Contemporary India Area Studies in 2010. NIHU recruits young scholars for its Center for Area Studies and assigns them to work with scholars at area studies centers in various parts of Japan. The asterisked items in the list below are hub research centers.



Islamic Area Studies

*Research Center	Institute of Islamic Area Studies, Organization for Islamic Area Studies, Waseda University
Major theme	"Islamic Civilization and Knowledge"
Director	SAKURAI Keiko
Research Center	Department of Islamic Area Studies, Center for Evolving Humanities, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo
Major theme	"Thought and Politics in Islamic Areas: Comparison and Relations"
Director	KIKUCHI Tatsuya
Research Center	Center for Islamic Studies, Sophia University
Major theme	"Modern Experiences of Muslims and Their Networks"
Director	KISAICHI Masatoshi
Research Center	Center for Islamic Area Studies, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University
Major theme	"International Organizations/ Institutions in the Islamic World"
Director	TONAGA Yasushi
Research Center	Documentation Center for Islamic Area Studies, Toyo Bunko (Oriental Library)
Major theme	"Creating a System for Collection and Study of Source Materials for Islamic Area Studies"
Director	MIURA Toru

Contemporary Chinese Area Studies

*Research Center	Institute of Contemporary Chinese Studies, Organization for Regional and Inter-regional Studies, Waseda University
Major theme	"China Becoming a 'Superpower'"
Director	AMAKO Satoshi
Research Center	Research Center for Modern and Contemporary China, Institute for Research in Humanities, Kyoto University
Major theme	"Multilayered Structure of Modern and Contemporary Chinese History"
Director	ISHIKAWA Yoshihiro
Research Center	Center for Contemporary Chinese Studies, Institute of East Asian Studies, Keio University
Major theme	"Chinese Politics, Foreign Policy and National Security in the Transitional Period"
Director	TAKAHASHI Nobuo
Research Center	Contemporary China Research Base, Institute of Social Science, University of Tokyo
Major theme	"Long-term Economic Development of China and East Asia: The Trajectory and Prospects of Industrialization"
Director	MARUKAWA Tomoo
Research Center	RIHN-Initiative for Chinese Environmental Issues, Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), NIHU
Major theme	"Globalizing China's Environmental Issues and Scenarios for Mature Society in East Asia"
Director	KUBOTA Jumpei
Research Center	Documentation Center for China Studies, Toyo Bunko (Oriental Library)
Major theme	"Construction of Japan's Information and Research Materials Center on Contemporary China: Understanding the Changes in Contemporary China through Systematic and Long-term Analysis of Information Materials"
Director	TSUCHIDA Akio

Partner Research Center

Research Center	International Center for Chinese Studies, Aichi University
Major theme	"Empirical Study about Structural Transformations on Changing Sino-Japanese Relations"
Director	TAKAHASHI Goro
Research Center	Institute of Grassroots China, Hosei University
Major theme	"Zhongnanhai Research: Socio-Political Survey of the Chinese Communist Party"
Director	HISHIDA Masaharu
Research Center	Contemporary China Research Base, Kobe University Interfaculty Initiative in the Social Sciences
Major theme	"Study on the Sustainability of China's Economic Systems: Beyond the Double Traps"
Director	KATO Hiroyuki

Contemporary India Area Studies

*Research Center	Center for the Study of Contemporary India, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University
Major theme	"Environment and Politics in South Asia"
Program Convener	FUJITA Koichi
Director	TANABE Akio
Research Center	Center for Contemporary India Area Studies, National Museum of Ethnology, NIHU
Major theme	"Culture and Society of South Asia"
Director	MIO Minoru
Research Center	Center for Indian Studies, University of Tokyo
Major theme	"Economic Development and Historical Change in South Asia"
Director	MIZUSHIMA Tsukasa
Research Center	Center for Contemporary India Studies, Hiroshima University
Major theme	"Spatial Structure and Development Issues in South Asia"
Director	TOMOZAWA Kazuo
Research Center	Center for the Study of Contemporary India, Tokyo University of Foreign Studies
Major theme	"Literature, Social Movements, and Gender in South Asia"
Director	AWAYA Toshie
Research Center	Center for the Study of Contemporary India, Ryukoku University
Major theme	"Fundamental Changes in Thought and Values in South Asia"
Director	DAKE Mitsuya

VII. Public Information Services

Lectures and Symposiums

NIHU holds lectures and symposiums in order to make the scholarly achievements in research on the human sciences available as widely as possible.

24th Public Lecture

"Japanese Studies in the World: Speaking from Kyoto"
June 7, 2014 Yurakucho Asahi Hall, Tokyo

25th Public Lecture and Symposium

"Global India Today: Economic Development and Democratic Government"
November 2, 2014 Kyoto University Clock Tower Centennial Hall, Kyoto

Publications

Ningen bunka

Ningen bunka publishes the proceedings of public lectures and symposiums sponsored by NIHU. Its content is published online through the current issue, volume 21 on the NIHU website.

Human

NIHU supervises the publication of *Human* to provide information on the achievements in research on the human sciences at its six institutes. The theme of issue No. 6 (July 2014) is "Japan's Frightful Spirits of Mountains and Rivers (*Chimimōryō*)" and that of the No. 7 issue (December 2014) is "The Past, Present, and Future of Kanji."

NIHU Prize in Japanese Studies

The NIHU Prize in Japanese Studies recognizes the achievements of outstanding Japanese studies by scholars from overseas. The prize was established in 2011 with the support of YKK Corporation in order to encourage and promote Japanese studies overseas. It is presented to researchers for outstanding achievement in scholarship on literature, language, history, folklore/ethnology, culture, the environment or other fields relating to Japan. The fourth NIHU Prize (FY 2014) was presented to Professor Irmela Hijiya-Kirschner of the Freie Universität Berlin for her achievements as a leading scholar of Japanese literature and her efforts to spread appreciation of the characteristics of Japanese literature through her critiques of works, studies of writers, and translations.

Intellectual Property

The Intellectual Properties Administration Office at NIHU maintains and manages intellectual properties, including writings and inventions resulting from research activities, in such a way as to make them available and useful to society. It also handles clerical work involving permissions for perusal, loan, and use of research materials in the collections of the six institutes.

Executive Directors

TACHIMOTO Narifumi	President
HIRAKAWA Minami	Executive Director
KONAGAYA Yuki	Executive Director
SATO Yo-Ichiro	Executive Director
EBARA Masaharu	Executive Director (part-time)
HIROWATARI Seigo	Auditor (part-time)
KOMAGATA Kiyonobu	Auditor (part-time)

Director-General of the NIHU's Research Institutes

KURUSHIMA Hiroshi	Director-General, National Museum of Japanese History
IMANISHI Yuichiro	Director-General, National Institute of Japanese Literature
KAGEYAMA Taro	Director-General, National Institute for Japanese Language and Linguistics
KOMATSU Kazuhiko	Director-General, International Research Center for Japanese Studies
YASUNARI Tetsuzo	Director-General, Research Institute for Humanity and Nature
SUDO Ken'ichi	Director-General, National Museum of Ethnology

Administrative Council

TACHIMOTO Narifumi	President, NIHU
HIRAKAWA Minami	Executive Director, NIHU
KONAGAYA Yuki	Executive Director, NIHU
SATO Yo-Ichiro	Executive Director, NIHU
EBARA Masaharu	Executive Director, NIHU
KURUSHIMA Hiroshi	Director-General, National Museum of Japanese History
IMANISHI Yuichiro	Director-General, National Institute of Japanese Literature
KAGEYAMA Taro	Director-General, National Institute for Japanese Language and Linguistics
KOMATSU Kazuhiko	Director-General, International Research Center for Japanese Studies
YASUNARI Tetsuzo	Director-General, Research Institute for Humanity and Nature
SUDO Ken'ichi	Director-General, National Museum of Ethnology
INAMORI Toyomi	Senior Managing Director, Inamori Foundation
IWAO Sumiko	Professor Emerita, Keio University
OHARA Ken-ichiro	President, Ohara Museum of Art
OKADA Yasunobu	President, The Graduate University for Advanced Studies
KADA Yukiko	President, Biwako Seikei Sport College
SAMURA Tomoko	First Deputy Commissioner, Secretariat of the Headquarters for Overcoming Population Decline and Vitalizing Local Economy in Japan, Cabinet Secretariat
TAKAMURA Naosuke	Professor Emeritus, University of Tokyo
TAKEDA Sachiko	Professor, Otomon Gakuin University
NAGAI Taeko	Journalist
FUJII Hiroaki	Advisor, The Japan Foundation
FUJIOKA Ichiro	Professor Emeritus, Kyoto Sangyo University
MIYAZAKI Koji	Professor, Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies
MOCHIZUKI Norio	President, Yomiuri Telecasting Corporation
KOIKE Yoshitaka	Head, Office of Administration, NIHU

Education and Research Council

TACHIMOTO Narifumi	President, NIHU
HIRAKAWA Minami	Executive Director, NIHU
KONAGAYA Yuki	Executive Director, NIHU
KURUSHIMA Hiroshi	Director-General, National Museum of Japanese History
IMANISHI Yuichiro	Director-General, National Institute of Japanese Literature
KAGEYAMA Taro	Director-General, National Institute for Japanese Language and Linguistics
KOMATSU Kazuhiko	Director-General, International Research Center for Japanese Studies
YASUNARI Tetsuzo	Director-General, Research Institute for Humanity and Nature
SUDO Ken'ichi	Director-General, National Museum of Ethnology
FUJIO Shin'ichiro	Deputy Director-General, National Museum of Japanese History
TERASHIMA Tsuneyo	Deputy Director-General, National Institute of Japanese Literature
KIBE Nobuko	Deputy Director-General, National Institute for Japanese Language and Linguistics
INOUE Shoichi	Deputy Director-General, International Research Center for Japanese Studies
SATO Tetsu	Program Directors, Research Institute for Humanity and Nature
KISHIGAMI Nobuhiro	Deputy Director-General, National Museum of Ethnology
OHTSUKA Ryutaro	President, Japan Wildlife Research Center
KUBOTA Sachiko	Professor, Graduate School of Intercultural Studies, Kobe University
SAKAI Keiko	Dean, Faculty of Law, Politics and Economics, Chiba University
SATO Soujun	Professor Emeritus, Nara Women's University
SATO Yumiko	Distinguished Professor, Otomon Gakuin University
NOÉ Keiichi	Special Professor by Presidential Appointment, Tohoku University
MORI Masato	President, Shokei University・Shokei University Junior College
YOSHIDA Kazuhiko	Professor, Graduate School of Letters, Kyoto University

Appendix II Statistics

Number of Staff Members

Institute	Executive Directors	Director-General	Staff of the Center for Area Studies	Research and teaching staff	Fixed-term employees	Administrative and technical staff	Researchers	Visiting fellows	Visiting Japanese faculty members
Administrative Headquarters	7	0	21	0	1	27	0	0	0
National Museum of Japanese History	0	1	0	38	2	42	0	0	8
National Institute of Japanese Literature	0	1	0	29	5	37	0	0	4
National Institute for Japanese Language and Linguistics	0	1	0	25	5	25	1	0	19
International Research Center for Japanese Studies	0	1	0	27	2	34	0	14	13
Research Institute for Humanity and Nature	0	1	0	20	4	24	0	4	21
National Museum of Ethnology	0	1	0	55	0	48	0	6	20
Total	7	6	21	194	19	237	1	24	85

(As of May 1, 2014)

Part-time Researchers

Type	National Museum of Japanese History	National Institute of Japanese Literature	National Institute for Japanese Language and Linguistics	International Research Center for Japanese Studies	Research Institute for Humanity and Nature	National Museum of Ethnology	Total
Research fellows	3	5	0	5	0	7	20
Research assistants	8	6	0	4	2	4	24
Project researchers	2	7	6	4	44	0	63

(As of May 1, 2014)

Budget FY 2015

Revenue	Amount	Expenditure	Amount
National subsidy for operational costs	11,590	Operational costs	12,035
Grants-in-aid for facilities and maintenance expenses	466	Education and research expenses	12,035
Subsidies and other income	0	Facilities and maintenance expenses	515
Center for National University Finance and Management subsidy	49	Grants-in-aid	0
Self-generated income	295	Industry-university cooperative research and other business expenses	282
Miscellaneous	295		
Industry-university cooperative research revenue, donations, etc.	282		
Transfer from voluntary reserves	150		
Total	12,832	Total	12,832

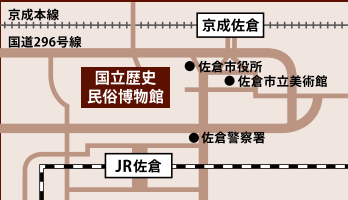
(Unit: million yen)

Number of Inter-University Joint Research Projects and Joint Researchers Enrolled (FY2014)

Institute	No. of Inter-university joint research projects	Total	Breakdown of organizations to which joint researchers belong						
			National university	Public university	Private university	Public institution	Private institution	Foreign organization	Other
National Museum of Japanese History	34	302	96	10	86	56	8	30	16
National Institute of Japanese Literature	9	92	28	2	34	13	4	1	10
National Institute for Japanese Language and Linguistics	32	418	185	22	132	11	3	41	24
International Research Center for Japanese Studies	18	371	92	22	155	14	19	32	37
Research Institute for Humanity and Nature	29	760	301	31	104	57	20	218	29
National Museum of Ethnology	46	555	195	34	195	26	10	60	35
Total	168	2,498	897	121	706	177	64	382	151

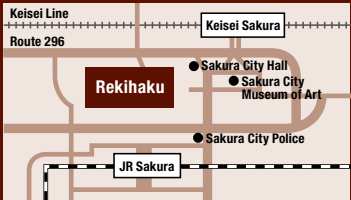
国立歴史民俗博物館

〒285-8502
千葉県佐倉市城内町117
TEL:043-486-0123(代表)
【最寄り駅】
京成本線「京成佐倉駅」(徒歩15分)・JR「佐倉駅」→ちばグリーンバス(15分)「国立博物館入口」下車



National Museum of Japanese History

117 Jonai-cho, Sakura City,
Chiba 285-8502 Japan
TEL: +81-43-486-0123
<http://www.rekihaku.ac.jp/>



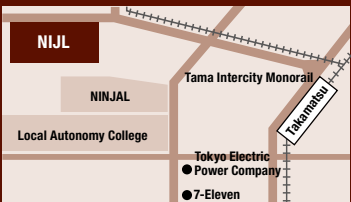
国文学研究資料館

〒190-0014
東京都立川市緑町10-3
TEL:050-5533-2900(代表)
【最寄り駅】
多摩都市モノレール「高松駅」(徒歩10分)・JR「立川駅」(徒歩25分)・JR「立川駅」北口バスのりば2番→立川バス「立川学術プラザ」下車(徒歩1分)



National Institute of Japanese Literature

10-3 Midori-cho, Tachikawa City,
Tokyo 190-0014 Japan
Tel: +81-50-5533-2900
<http://www.nijl.ac.jp/>



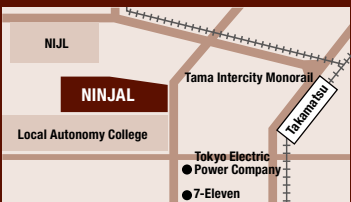
国立国語研究所

〒190-8561
東京都立川市緑町10-2
TEL:042-540-4300(代表)
【最寄り駅】
多摩都市モノレール「高松駅」(徒歩7分)・JR「立川駅」(徒歩20分)・JR「立川駅」北口バスのりば2番→立川バス「自治大学校・国立国語研究所」下車(徒歩1分)



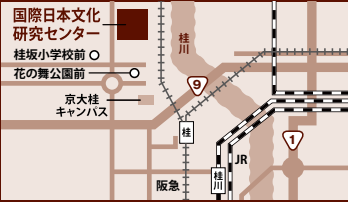
National Institute for Japanese Language and Linguistics

10-2 Midori-cho, Tachikawa City,
Tokyo 190-8561 Japan
TEL: +81-42-540-4300
<http://www.ninjal.ac.jp/>



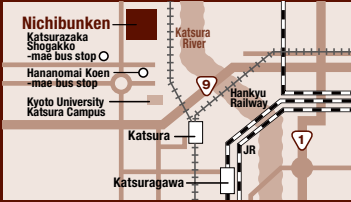
国際日本文化研究センター

〒610-1192
京都府京都市西京区御陵大枝山町3-2
TEL:075-335-2222(代表)
【最寄り駅】
阪急京都線「桂駅」→京都市バス(30分)「桂坂小学校前」下車
JR東海道本線「桂川駅」→ヤサカバス(30分)「花の舞公園前」下車



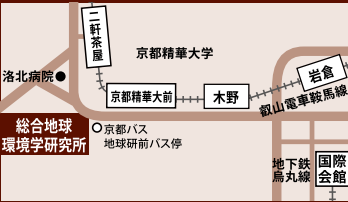
International Research Center for Japanese Studies

3-2 Goryo Oeyama-cho, Nishikyo-ku,
Kyoto City, Kyoto 610-1192 Japan
TEL: +81-75-335-2222
<http://www.nichibun.ac.jp/>



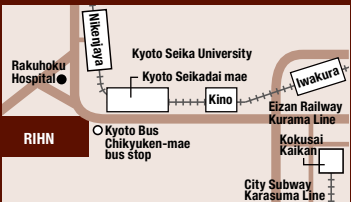
総合地球環境学研究所

〒603-8047
京都府京都市北区上賀茂本山457-4
TEL:075-707-2100(代表)
【最寄り駅】
地下鉄烏丸線「国際会館駅」→京都バス(6分)「地球研前」下車
叡山電車鞍馬線「京都精華大前」(徒歩10分)



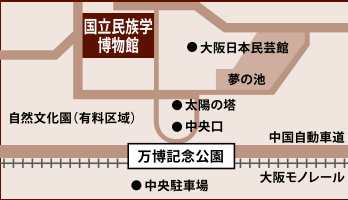
Research Institute for Humanity and Nature

457-4 Motoyama, Kamigamo,
Kita-ku, Kyoto City, Kyoto 603-8047
Japan
TEL: +81-75-707-2100
<http://www.chikyu.ac.jp/>



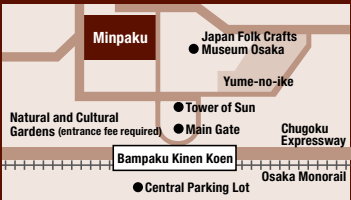
国立民族学博物館

〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10-1
TEL:06-6876-2151(代表)
【最寄り駅】
大阪モノレール「万博記念公園駅」(徒歩15分)



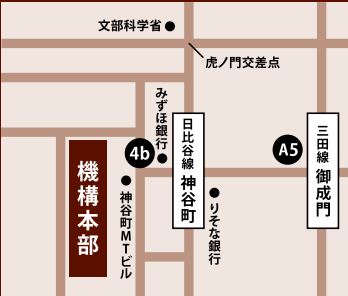
National Museum of Ethnology

10-1 Senri Expo Park, Suita City,
Osaka 565-8511 Japan (on the
Premises of Expo Park)
TEL: +81-6-6876-2151
<http://www.minpaku.ac.jp/>



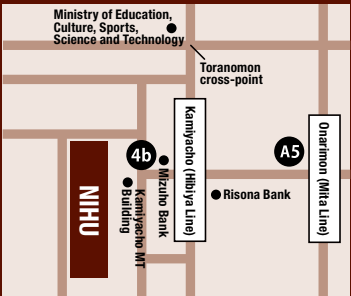
大学共同利用機関法人
人間文化研究機構本部

〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13
ヒューリック神谷町ビル2階
TEL:03-6402-9200(代表)
【最寄り駅】
地下鉄日比谷線「神谷町駅」(出口4b徒歩2分)
地下鉄三田線「御成門駅」(出口A5徒歩10分)



Inter-University Research Institute Corporation
National Institutes for the Humanities
Administrative Headquarters

2nd Floor, Huli Kamiyacho Bldg.4-3-13
Toranomon, Minato-ku, Tokyo 105-0001 Japan
TEL: +81-3-6402-9200
<http://www.nihu.jp/>
(Nearest Station)
Kamayacho Station, Tokyo Metro Hibiya Line
(2 minutes walk from 4b Exit)
Onarimon Station, Toei Subway Mita Line
(10 minutes walk from A5 Exit)



リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

この用紙はグリーン購入法に適合しています

2015年6月発行